

常磐松文庫蔵 『九条家本源氏物語聞書』 翻刻(三)

渡 邊 道 子・徳 岡 涼

川 島 絹 江

凡 例

一、本翻刻は、本学常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』（五冊）のうち、第三冊目の「蛭」―「鈴虫」について、可能な限り原本の様態を復元し得るように翻字することを目的とする。なお、本冊は、現行巻序と異るところがあるが、すべて、原本通りに翻字した。

二、右の目的を果たすために、翻刻の際には次の基準を設けた。

- 1、改行は原本に従う。半丁毎に「」印を付してその下の（ ）印内に、墨付丁数及びびオ・ウの省略符号を付記する。但し表紙・見返し・前遊紙の場合は、その旨を「」印下の（ ）印内に記載し、丁数には含めない。
- 2、本文・書き入れ注共に全て原本に忠実に翻字した。猶、不審の箇所があっても、みだりにこれを改めることはしなかった。

3、一応現行の字体に翻刻するが、異体字を残したところもある。又、意識して片仮名表記がなされていると思われる部分に関しては、片仮名表記を残すこととした。

4、見せ消、合点、濁点その他の諸記号は、可能な限り、原態に即して表記することを原則とした。また頭注・傍注・脚注等の書入れが二行以上にわたっても、そのまま忠実に再現する。

5、紙片貼付の箇所には□印、また注記・補記すべき箇所については○印を用い、下の欄外にその旨を記した。

三、各巻の礎稿の担当は次の通りである。

螢・螢夏・篝火・初音・野分・御幸（渡邊）
藤袴・真木柱・梅枝・藤裏葉・若菜上・若菜下・柏木（徳岡）
横笛・鈴虫（川島）

翻 刻

（外題なし）

（白紙）

（白紙）

（白紙）

┌（表紙）

┌（見返し）

┌（前遊紙オ）

┌（前遊紙ウ）

ほたる

卷名哥并ニ詞をもつて号せり 堅ノ并也源卅六ノ夏也

聲はせて身をのみこかす螢こそいふよりまさる思なるらめ

(一行分空白)

今はかくおもくしきほとによろつのとやかに――

のとやかにと云詞のなき本もあり御位高く棟梁に成

給ふ故に細かなる事ハかゝはり給はぬ也

あらまほしくて おもひのまゝにてと云心也

思ひの外なる―― 源し好色こゝろをかけ給支也

さまことに―― しやうかはる事なり

うち出。給ひては 大たの忝と前ニの給ふニ答て書り

わらゝかに―― にこやかに也和字をかく

御返りときく―― 玉鬘は一向ニ取合給す

人くもことにやんことなく―― をとなしくよき女房

達なし

なにかとおもふにはあらず―― 兵口卿宮をあななち思ふ

にはあらぬ共也

むもれたりと 入めなる支也

いとゝしき御にほひの―― 源氏の御句也

ことなかき―― 兵口卿よりの給詞の様く長き事也

まことの吾姫きみをへ―― 草子なり此姫君ハ明石ノ

ひめきみなるへし

ことかたより―― 源氏御帰也

「(1オ)

「(1ウ)

右肩「九條一印、右裾ニ「実践
女子大学図書館」印アリ。

虫損。

虫損。

虫損。

一まはかり—— 一間なるへし

そびやかに いさゝかせいたかき事也

あのごと 哥 あんのごとく也

なく聲も—— 無理には消れぬものそと也

時ハかりをそ 哥 時ノ躰はかりをよめる也

こゑはせて—— 時の躰はかりほたるの上はかりをざつと

讀返事 = 取合給すは一説なり

ほとゝきすかならず—— 種々説あれ共只時の風流なる

躰はかり見たるか可然と素然仰らるゝ種々ノ説却而如何と也

うちくはしらて—— 内々ノ女房達は知らて也

さるは—— さあるは也 源氏の御心なり

五日ニは—— 蛭の事は四月の夜の事と聞えたり

つやも色も—— つやとハ色の外にあるぎんの事也

おもふ事なくは—— 御子分にてなくはと玉鬘ノ思ひ給ふ心也

見るほと—— 筆者の詞也ほめたり

ためしにも引出つへき—— 一段長キね也菖蒲は根の

長きか賞翫なり

これかれも—— 人くなり

手を今すこし—— 玉鬘の手跡はよくもなかりし也

御心にもいかおほしけん—— 源の好色かましましき夏六かしくて

兵衛卿へ成共かた付度とおもひ給んはと也

たいの御かた—— 此は玉鬘也

こなたのはこきひとへ—— 花ちるの御方也

「(2ウ)

「(2オ)

肩ニ「哥」ト墨書ノ痕アリ。

大やけ事にはさまかはりて——公役には皆人はだして不

参也是にはうきそゝろきて参れり如此なるもの也

すけたち——左近亮右近亮となるへし

督亮慰目同事也すけの内也

たぎう楽 打毬楽はぎつちやうにて玉をうつ也 五日武徳

殿の騎射はてゝ打毬の事あり唐人の装束にて馬^ニ乗て毬

子^ヲ走らしむるをいふその時奏する楽をたぎうらくと云る也

花鳥の説

こなたにおほとのごもりぬ はなちるの方也

物かたりなと——源と花ちると也

猶あるをは——残の人この事は何共仰られぬ

けふめつらしく——いつもは御あそひなと此所にてはなし

にを鳥に影を——花鳥説ハわらし晁説此哥ノ

心には鳥は枕詐也影をならふる鳥なればよめりわかごま

あやめとかけをならふる也 曳別るへきとは花ちると源と

の御中の事をたハふれ給也 わかごまとは若キこも也もと

まと相通也

あいたちなき——物語の家ニかけり

なが雨——さみたれなり

つきなからぬわかうどあまたあり 先ノ詞に稀なると有てこゝに

相違のやうなれ共さはなしあまたあるとは繪なとかく程の

人はあまたあり実ニよき人はまれなる也

かた心つくかし 其やうなるとの心なり

┌ (3オ)

┌ (3ウ)

虫損。

虫損。

偽なれたる—— 源をさして玉鬘ノの給り

こちなくも—— 無勿^{フナツ}ニ也 聊余^ニ也

日本記^{ニホニキ} やまとぶみと然るへしと院様は仰らるゝと也

何れ^{ナニ}ニても苦しかるましと素然は仰らるゝ

世にふる人の有さまの—— 寓言^{ワカモノ}事こゝに又書り我か

支を以て人の事をかく也莊子も同之

ひたふるにそら事と—— 是此物語の大意なり

よくいへはすへて何こともむなしからす むたとした支

にてはなきとなり

物かたりをいとわさとの—— 古キ草子の事也

けどをきものゝ姫君—— 昔^{イマ}事也誰共なし

又なき心ち—— 玉鬘ノやうニつれなきは又なきと也

かくしていかなるへき—— 草子也

わらへとちたに—— 古物語にさやう、支ある歎

好みあつめ—— 又此見あつめとも 何れもよし

たいの御かた 玉鬘也

人ぼめさせじなと あかしの姫きみの支也

猶かのみとりの—— 雲の鷹^{トビ}

たいの姫君—— たまかつら也

さかしらに—— さし過てと云心也

君たちにも—— 御子^{ミコ}たち也

わかおもほすにしも叶ぬ—— 御むすめ弘徽殿の事也

(八行分空白)

┌ (4オ)

虫損。

虫損。

┌ (4ウ)

┌ (5オ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

追

ほのかなるひかりえんなることをつまにもしつへくみゆ

つまとははしと云事也　むかしを忍ふつまとなりけり

哥と同じつま也　軒のつまと云も軒のはし也

身をなげたるてまどはし　當りを詮に心かけて弓前

のわるきうもかまはぬやうなる心なり

物ぐるをし　狂也　苦てはなし

いたくもならしきこえし　今よりしてハあまり馴くしくは

無用の事そと源氏の仰らるゝ也

(二行分空白)

(白紙)

(白紙)

常夏

哥并詞を以て名とせり　源し卅六歳の夏也

撫子の床なつかしき色をみはもとのかきねを人や尋ん

(一行分空白)

あつがはし　暑也

いかて聞し事そや——源の詞也

けそん　家損家のきずといふ事也　けもし清

ふくつけき　欲ふかき也

中將の君も——まめたゝす　おかしくおもへる也

此中將はかしは木との説もありいかゝ

朝臣や——夕霧をさして源の御詞也

┌ (7オ)

┌ (5ウ)

┌ (6オ)

┌ (6ウ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

いと物きらしく——善も悪もかつきとした
心也
といで給へ 外へ出給へなり

うちくのだしく——源氏の御卑下

世に過てことしく——世上にことしく源

御分際よりもおもはんと是猶御卑下なり

すぎ事いひよらんにつきなしかし 御卑下

山かつの中にも——田舎の事を云り曳志は田舎な

とにもあまたある程に心易引ものかと思へは様かはりて大

変の物なるよと玉かつらの給へる也

すがよく 琵琶にはなき事也

ことつひいとなく ことついと讀給り ことつびきびうと

有が本説也上へ異説也然れ共異説を用へしことつ

ひとは事のしなと云事歟

さうぶれん ふもしにこるへし 唐書=生府蓮共あり

それは心か別歟猶可尋

此人くの立さり——源少将弁少将など也内大臣の御

子達也

限なき心さしと——いかによき人とはいふ共紫上にはたま

髻もえならひ給ましと我なから源のおもひ給也

納言ナツシ なうごんと讀へし

ものし給はねば 御子のなき変也

けしきあるところ付給へる人——源氏の御事也

少将も御ともに——弁少将なり

「(7ウ)

「(8オ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

ふどうのたらによみんつくりて——是はいか／＼

しき体をいふ也

むかしは何事も——雲井の鴈の心中也

大宮より常に——疎々しきとて内のおとよを恨み給也

かくの給ふか——雲のかりの事をの給也

今ぞみ 近江の君なり

かね言に——かねて云程にはないと也此詞は女御の御推量也

せうさい／＼ 小賽 小目也

御返や／＼ 大目を乞欸

ひぢゞかに 土近也 塵イひちの心也賤しき心なり

手うたぬ心地し侍れと たらはぬ心なり 河海ノ説尤也

みしらす—— 近江君のみしらす也

おほみおほつば 尿壺 二つに非ず 一つ物也河海ニ委見 おほみとはかしつく詞也 たい大壺なり

おこゞと ざれ事也

みしろぎ給にも—— 近江君の見送る也

こせち—— こせちとハ分ニ過たる事也近江君の親には

あまりこと／＼しく分ニすぎたると云也中邊なる親ニ尋

出されてかしつかれ給んハまさるへしと也よろしとは中

邊なる儀也曆などによろしき日とあるも同事上ニノ吉日ニハ

やふり出給ふ愛にて句を 切てよみ給り いてめさまし—— アラス

もとすゑ—— 歌ノ上ノ句下の句也

天下 かもし濁給り あめしたとも讀へし

ひすましわらハ 下女なり

「(8ウ)

「泥」ノ字墨色異ナル。

「(9オ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

返こと切て下をかくゆへくし 非書の字

御かた切て下をみて――

あまえたるたきもの 甘き匂のするハあしき焼ものゝ

くせ也

へにといふ物―― 近江君の事此物語の狂言ニ書り

諸抄ニいへりされ共狂言はかりニ非す諸女の戒メにかくと

聞えたり

(二行分空白)

(白紙)

(白紙)

篝火

豎並 源氏卅六才ノ秋の始也 哥并詞を御卷の

名とす かゝり火に立そふ恋の煙こそ世にはたえせぬほ

のをなりけれ 贈答の心也

(一行分空白)

ともあれかくもあれ―― 近江君ノきよようの事也

人みるましくてこもり―― 男子こそあれ女子は

人に見せぬ物なれは何共しやすき物をと也

きはくしく―― 此大臣は惣してものをきはくしう

し給ふ人なり

にくき心こそ―― 源氏の好色心也

せこか衣も も文字に心あり吾も人もと見るへし三光院

殿の御説也

折山部分デ紙ヲ継グ。

折山部分デ紙ヲ継グ。

かゝるたくひ——源の心とみへし玉鬘の心とみるはわるし
わたり給なん——御帰あらんとて也

たえず人さふらひて——御帰あるへき跡の事を仰付
らるゝ也

いつまてとかや爰に句を切て
下を讀へし夏なればやとにふすふるかやり火

のいつまて我身したもえにせん 此心を少し取かえて書
たりおもしろき書様なり

頭の中將 かしは木の中將なるへし

しのはれて てもし濁へし

源中將は 夕ぎりなり

弁少將は 紅毒ノ右大臣也

さかつきなと心してを讀切て
下をよむへしさかり過たる人は

源しの言葉也さかり過たるとは自謙也下心は玉鬘の事を

とはす語やせんと思しめすなり

あはれときゝ給 玉鬘は源の仰出されよかしとおもひて

聞給ふ也

かきわたさず 琴の事也

(三行分空白)

追

くはやとて くわやと讀へし

さたにおもひよらす 頭中將の心也

(八行分空白)

慶長十三申二月廿三於水無瀬殿 中院殿也足軒御

┌ (12ウ)

┌ (12オ)

┌ (11ウ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

講尺 此卷より讀はしめ給ふ心は此卷は祝言也桐壺は
不祝言なり此ゆへに此卷を初ニよみ給り先年声箏

齋ニいさゝか聴今ノ説ニおなし不祝言ノきりつほを最初ニ書
たるも心を付てみるへき事と心前申されけり

此卷玉髣の卷に付てみへし五かつらの列傳とみるへし

玉髣ノ并は悉く豎也 此卷源氏卅六歳

哥并ニ詞を以テ卷の名とせり 十七ノ卷の翌年ノ変なれば

豎の並ニとるへし 年月をまつにひかれてすむ人に

けふ驚の初音きかせる此歌を以号ス

(一行分空白)

(白紙)

はつね

年立かへる 是は六条院にて二度めの春也

うらゝかげさ けもし濁へし

数ならぬ垣ね 下ノ諸人のかきね也

けしきだつ たもし濁へし

にハよりはしめ 庭也

御かたノ 四町の中の御方ノなり

としたちかへると云より御庭のありさま御かたノとあるへ懸て天

地人とみるへし

いける佛の御くに 生佛国 極楽ノ事也人間の上には喩なし

姫君 あかしの姫君也

はかためのいはひ 齒

┌ (13才)

└ (13ウ)

┌ (14才)

折山部分デ紙ヲ継グ。

下ノ部分ヲ擦リ消シ裏ヨリ紙ヲ補ウ。

年のうち 常ニ云は冬ノ事也こゝは當年中ノ事也

いとしたゝかなる 是より源氏仰らる

みたれたる事とも 戯レ事也

けふは子日なり 此元日子ニあたれり 又ハ子ニ限らず松を引

ての野遊也祝言也

五葉のえたに これはつくり姿也

ふる人 經古兩説也いつれにても

御硯

くだしくそ 歌くたゝしき也よきは稀なる物也あかしの

姫君をさなくおはしませは也くたゝしきは哥のわるき

さま也ゆうゝと有度と也式日歌のをしへも書り草

夏の御すまゐを―― 時ならぬけにや けとはゆへにやと

云心也 けもし済む 是は花ちる御かたなり今は春也夏の

御事なれば時ならぬとは云なり

わさとこのましき―― 別したる事もなし花ちるの本性

をあらはせり

年月にそへて―― 草子の地也

まださでおはす そのまゝゐ給ふ也 てもし濁々さうで也

はなだはげに―― あはひにて 色あひの事也

やさしきかたにあらねとえびかつらしてそ―― 前ノ詞にいもせ

事を云り伊弉冉ノ尊よりのらいれき也又爰ニえびかつら

の事あり前の古事ニこたへて書り委々河海ニアリ畧之

つくるひ給へき―― 源氏の御心ニつくるひ給へかし

〔(14ウ)〕

〔(15オ)〕

折山部分テ紙ヲ継グ。

おほしめす也

物おもひにしつみたる—— 玉鬢は夕顔の支よりはし

めて程く＝物をおもひし人也

かくて見たらましかは—— 田舎＝置てハ如何くと源氏の

おほす也

えしもみすべし—— 好色心欵 草子

へたよりおほく—— 実父＝あらされは也

とし比に 源ノ御こと葉なり

あなたなにもわたり—— 常＝源の御座ある紫ノ

上の方へ也

あはつけき—— むらさきの上の事也

けにさもある事そかし 草子

えひかつら えいかう何れもくるしからす兎角＝衣裳

をにほはするものとしるへし凡河海＝見へたり 也足

被仰薰物とは聞えず

めつらしや—— 花のねくらとハ紫上谷の古巢とはあるし

のうへをさしてよめり

さけるをかへに—— 櫻花咲る置へに家しあはれはと

くもあらず鶯の聲 此哥ノ心也同殿＝あれハともしくも

あらぬと我とわか心を引かへしなくさめらるゝ也明石上ノ哥也

さすかに—— をさへたる詞也 され共なとゝ云様なる詞也

しろきにけざやかなる 白とは衣裳の事也

まだ明ほのゝ—— 夜深く婦り給を御忍ありきにて

も

〔 (16オ) 〕

〔 (15ウ) 〕

折山部分デ紙ヲ継グ。

なしかやうには有ましき事と明石上のおもひ給ふ也
待とり給へるハた—— 紫上ノ心也

けやけし めさましき事なり然共こゝはわつらはしと
云心に見て然へし

おもかくし給 正体に向はぬ事也

いうそく 有識とは出家の上などにては知識と云ニ同じ

物しりの事也 又右族是は花族也れきくくの類なり

こゝは右族よし仁物よりはしめ藝能ニいたる迄足たる人の

事なるへし

此院へ参るには—— 六条院也

花のかさそふ夕風—— 梅なるへし

つれなき人の—— 源し也

人の程あれは—— 位ある人なれば也

瀧のよとミ—— しらがのましりたるを云り瀧の

岩などにかゝりて淀む時は白きもの也

柳はけにこそ—— 着なし給へる人のあしきにより
て

柳色もすさましきと也

くろきかいねり 黒ミたる物なり 花鳥ニくはし

さいくしく 楚々サイクン やはらかならず しやきとし
たる

事なり

かゝる事にも—— 仁物以下ようつに付て也

ふくみなへたる—— ふくみは縮あつき事也なへたと

やハくとしたる事也

は

「 (17才)

「 (16ウ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

かへきぬ—— 結構なる物也當代はまれなるものと也
皮にてしたる物也

きすぐ—— 余り打とけ給へれば其ニ随て源氏もきすぐ

一人ニ成給ふ也木男なと云心也 木強人キヌグヒト

いたはりなき—— 惜からぬ心也

おれくし 退窟の事也

むかひの院の御くら 東の院の向イ也

古郷の春の梢—— 鼻の事なれ共すゑつむの君心をそき

人にて聞しり給す

うけはりたるさまにあらす りうむのさまにへあらず卑
下したるさま也

あをにびの木丁 青はな染也

かゝるかたに頼み—— 空蟬ノ君の詞なり

かのあさましかりし—— 紀守か事也紀守ゆへニ出家なり

あなたを見やり給ふ 末摘のかたをいふかひあれかしとみやり給也

たゝかきりある—— 源の御詞なり命ノ後誰かかくれん

みんせんと各を憐ミ給也 。雲かくれの卷名はかりなる
事

妙也かやうの人々の命終の吏書さる所おもしろし

其内源氏の御事は何共書へき欵なれ共かやうの人々の果

く見くるしかるへしかゝさるははるか書にまされり妙也

ことしは男たうかあり 女踏哥は毎年也男踏哥は角年ニ

あり是ニよりて今年はおとこたうかと書り
通のほと遠くて 大々裏より六条院までは遙く也

┌
(18オ)

┌
(17ウ)

上も一とところにおはす 紫上なり

みづむまや 昔は秘事ニ申傳たれ共余り秘すへき程の事

なし 花鳥ニ くはし にも

きささいの宮 きささきの宮也

ことそがせ給へき 畧したる心なり

例ある事より—— いつもより事くわへて也

大殿の君 是は夕霧なり

かよれる—— たをやかなる躰也

よはなたるさま はもし清 世をはなれたるやう也見馴

ぬゆへに也

中将の聲ハ弁の少将にをさくをとらす 柏木なるへし又は夕

霧と見てもくるしからす 弁少将は紅毒ノ右。臣なり

いにしへの人は—— 風流かましき藝能などは古人にもま

さらんと也

中将などをハすぐくしき—— 源氏ノ御心也 直々

夕きりをは實なる人ニ成ンとおほしむ也わか身の如くなる

風流めきたる事はもてはなれよとおほししかと下には又

少し数奇たる方もあらまほしとおもひ給し也然るに

願ひの如と思し召なり

すくよか くもし清テよみ給し時もあり又濁リ給ふ時も

あり如何

ばんすんらく 万春楽也 私悉曇ノ切ン如此也

ごゑん—— 後宴 此宴つゐになかりしと云一説あれと

「 (18ウ)

「 (19オ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

あるしありと聞えたり 竹川卷ニ

(一行分空白)

ひめをかせ給へる—— 源御秘蔵の御琴也

(一行分空白)

(白紙)

(白紙)

野分

豎の并 源卅六歳 以詞為卷名 秋八月ノ事也

(一行分空白)

色草 色／＼の草也

ませ しめと云も同し

御き月 如此讀へし

露の玉をミかけるたるまゝに—— 此卷の事みてるを

欠道理にて書り一段おもしろし人間皆かやうなる物也

いましめ也

南のおとゝ 紫上の御方なり

もとあらの小萩—— 引哥宮城野のもとあらのこ萩露を

おもみ風を待こと君をこそまで

こさうじのかみより 障子の上也帯にてはなし さうじとは

ふすま障子なり

中将の君まいり給て 夕霧なり

けどをく—— かううつくしき人を夕きりなとに見せて

もしも心をうつしては如何と源のおほし召也

┌ (19ウ)
└ (20オ)
└ (20ウ)

┌ (21オ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

折山部分デ紙ヲ継グ。

いたりふかき御心に——御分別也

今ぞみとかめ給ふ 源氏の也

めつらしくうつくしきめを——紫上なんとも見つる事也

この御前はのどけき也 南面なる故に此殿は風うら也うし

とらより吹と上の詞にあり

わかき子のやうに——三条ノ大宮の事也

かくさはかしげに——三条ノ大宮へ源ノ御言傳也

おとゝのかはら 殿の棟瓦なるへし

かくてもものし給事とかつはの給 野分ノまきれに

あふなき事そとの給ふ 花ちるの御夏

ひんかしの御かたさるものゝ数にて 夕霧の心なり

人からのいとまめやかなれば 夕霧の心なり

うるさながら うるはしながら也 うるはしとはよき事也

かくなんなき 無難なり

此君して 夕ぎりなり 源の也 風病也

おこり合侍て 四五人

しをにことくくに——

侍従のかにことに——河弄二説共ニ如何花の説可

然と三光院殿仰らるゝと也 又しをにことくニ匂らんと

ある本もあり是は匂なきしをにさへ御袖の追風に

にほふかと也 素然は如此御講尺あり

宰相ノ君 秋好中宮の御女房也

┌ (21ウ)

┌ (22オ)

下ノ部分ヲ擦リ消シ裏カラ紙ヲ補ウ。

折山部分デ紙ヲ継グ。

虫損。

中将のあさけの——夕霧也

わか御かほ——草子

あらはなるゆへくしきもみえ給ぬ——紫上ノ

心をの給り下ニハよく物を分別して上ニハ見え給ぬ人そと源ノ
仰らるゝ也

思ふ事のすちく——雲井の鷹の事ニ又紫上ノ夏

さきおふ聲——同じ殿の中にもかやうなる歎

小桂ひきをとして 衣桁よりおろす也これは源氏ニ對し

ての礼儀也

から心うけれ——玉髻の詞なり

風につきて——源好色ニ云なし給也

まみ 目の上也

ことくなれくしきに——けしからす馴ゝしき也

むべなりけりや——此一段ちと聞えにくき義理なり

きのふみし 紫上也

さゝめき 清ム

ひか耳にや 夕きりの

ほそびつめく物 ぬりおけなどの様なるもの歎ト也

御前のつほせんさいのゑん 宴也 ゴゼント讀給り

けもんれう 頭紋紗也 紋を上へをり止て頭スニ依て

如此号する歎

六かしくかたく——夕霧源しの御供をし給也

ほどくしく——をどろくしき也 ともし濁

いな是は——卑下して云り恐かましいとなり

北のおとゝの覚を——花鳥ノ説わるし晝花のもの

┌ (22ウ)

┌ (23オ)

虫損。

折山部分デ紙ヲ継グ。

虫損。

如何三説あり其内ニなのめなる心ちとは明石ノ姫君躰をし
ゐて忝おもいて御硯にて書給と云一説あり此義を談し給り
むらさきのうすやう—— 昏の色なり

風さはきむら雲—— あしき歌也 その故は儒業をのみ

詮ニ学し給て哥道は次なりしによりて哥こはくしき也
かやうなるもの也 にくき口つきとかけるはこれ也

おもひくらへまほしくて 夕霧ノ心中

うすいろの御ぞ 紫のうすいろなり

まだくけにははづれたる—— せいにたらず たけにはづ

るゝとは余る事を常にはいへとも是はたけに足ざる夏也十一
歳なれはいまだ髪みしかし

さくら山吹といはゞ 紫上はかは桜玉鬘は山吹にたとへたり

心うくて 大宮の御心

それなん—— 世話に。それぢやほとにと云心也

とや 式部例の筆つかひなり

(九行分空白)

追

風こそ岩ほも—— 景行天皇三年—— 略之河海ニ委

先例かやうの事あり昔有し事を引て皆書り捻して

此物語なき夏をは少も書す無事の有夏といふは此道理なり
簞木巻によくしるすもの也

(六行分空白)

(白紙)

┌ (23ウ)

┌ (24オ)

┌ (24ウ)

┌ (25オ)

┌ (25ウ)

虫損。

折山部分デ紙ヲ継グ。

御幸

以哥為卷名 豎の并也 源氏卅六ノ十二月の事也

あくるとし卅七歳の二月迄の更此卷ニあり

(一行分空白)

南のうへ 紫上也

かのおとゝ 内大臣なり

おもひぐまなく 思ふかひなき也内大臣の^車もなくおも

はれんとなり

けさやかなる—— ことくしう^車なんとニなり

おぼしかへさう おもひかへし給也

朱雀より—— 西の朱雀なり

そ^悉 諸衛也 六府也 六衛府ノすけ

あしよは車 輪のよはき車なり

ミかとのあかいろの—— 冷泉院也

わが父—— 内大臣なり 玉かつらの心

おほせごと^ハ—— 作者の詞と花鳥に云り此儀はわるし詞ニ

あらず作者の心也

その比ほひ—— 作者のことは也

かの事は—— 内侍のかみに成れん宮つかへの事なり

うちきらし—— 打霧^{ウチキラン} うちくもる心也昨日はとあるに其

まゝ引付て打きらしとみるへし

おほつかなき—— 御かとの容義のよき事も宮仕ノ更も明

申かたきゆへにかくのことく申さるゝ也 かに

┌ (26才)

┌ (26ウ)

下ノ文字ニ重ネ書キ。

下ノ部分ヲ擦リ消シ裏カラ紙ヲ補ウ。

又御返 哥あかねさす 源の御哥也

めをきらす 目を霧す

よだけく 大なる事也 たもし薄ル

我心ゆるして 吾方より仰出されんと也

こしゆひ 裳をきする人也男ノ上にては鳥帽子親の如し

男女不定

めつらしく見奉る 大宮の心中

けしうは—— 源の御詞也

うちなとも—— 同人の御詞也 大身ニなりぬれば

おほやけに参り給ふ事も稀なり

是よりまさる人—— 源より老たる人なり 御自講也

おれくしき ぶしやうなる心也 又おろかなる心也

心つきなしとミ侍しかは 見侍しゆへに也

出たちいそき 臨終の事也

さること 源氏の御心

いふかひなきにゆるして—— 男哥 千草にもおほふはかりの

袖とみて尾花かゆるす野への秋風

とりかへしすゞき—— しなをす事はなるましと

嘲り給也

さるはかのしり給へき人を—— 内大臣の知り給へきをと也

玉髪の事なり

内侍のかみの—— 女官ノ司サ也 女御更衣は官ニ非す主上ノ

御妻也是は后にもなる人なり

┌
(27ウ)

┌
(27オ)

擦り消シノ痕アリ。

したゝかにかしこぎ—— 内侍のかみの家職ノ事を案内
者の支なり

此としころうけ給りてなりぬるにや 源御憐愍ふかき
を聞及て御子に成ぬるにや

まうち君 諸大夫也

さし合せて—— 大宮と源氏とさし合せてなり

けしからぬ御あやにく心—— 草子

しうとく 宿徳 法花普門品ニ云宿植徳本 先世ノ徳今

世ニあり 又をとなくしき躰也

東宮の大夫

さふらはではあしかりぬへき—— 参らてはあしかりぬへきと也

かうじ 勘当の支也

よだけき ことくしきなり

御なやみもよろしく—— 大宮の御煩よき也

れいのわたり給て 玉鬘ノ御方へ

おもひあはすること—— 野分の朝の事也

御けしきにしたかひてなん 源氏次第ニと也

いたしや ほめて云る詞なり

三十一字 如此ニよみ給り

一具 同前

あはせのはかま 裏の有袴也

ゑりふかく ゑり入たるやう也

よしなし事 無用の支也 草子の地也

┌ (28ウ)

┌ (28オ)

うちのおまし 簾中の事也

曳むすひ給ほと 腰ゆひの事也

奥つ玉もを—— 裳ニよせて云り

入おはして 簾中へ

出給ぬ 簾中より

猶しはし御心つかひして 内大臣ニ源氏の御詞也

ひき出もの 腰ゆひし給ふ人にも引出物あり

このさがなものニ君 近江の君なり

いかなる人ニ方に

おまへのつらく—— 女御をさして云る也

さしこもり給なんや さしこもり給へ也

をといとけさやかに をとはをつと答へたる也

夢にとみしたる 富したる

むねに手をニきたる—— 驚たる心

つま聲 本人の云ニ支に添ていふ事なり 声濁へし

世の人ははぢかてら 内大臣のしやうわるしなとニ

世間にはとりくニ云也

(二行分空白)

追

しかくニの事をそニのかし—— 林ニ云源の御詞也玉鬘

の宮仕の支を紫上へ御談合し給也

子なからのおほえにハ—— 同玉かつらを源しの御子の分ニ

て内侍のかみニ参せんは中宮の御心中びんなしと也

┌ (29オ)

┌ (29ウ)

わか人のさもなれつかうまつらんに——との給へは

源氏の詞也主上を見奉る人の憚所なき人の宮つかへを

いやとおもふはあらしと也は^レかり所とは中宮女御の御

事を玉髷のは^レかり給ふ也

中将の君もよるひる三条にそ—— 夕霧なり

うち笑給ていふかひなきにゆるして——

をさなきすぢの事とおもひすて給へかしと也 又いふ

かひなきと也 源の御詞なり

こ^レにきへなん—— こなたへも雲井のかりの事を源し

の申侍しとなり

何にさまで—— 源御詞也内府の事外諫^イたまふ程に

源の大宮へ申給し事もくやしと也

今はとつけやり給へきと^レこをりもなきをと——

玉かつらの実父出来給へは源の御とりもちも憚給へき

事也となり

かへさいそうし—— 冷泉 内よりの給事のさなくは玉鬘を

兵部卿へ参らせんと也 かへさいとは返す事也

ことさまの事ハ—— 内よりもしいやとの仰のあらは余

の所へは参すまし兵部卿へまいらせんと也

(九行分空白)

(白紙)

藤はかま

卷名歌を以て号せり 源氏卅七歳八月九月ノ支也

┌ (30才)

┌ (30ウ)

┌ (31才)

┌ (31ウ)

下ノ部分ヲ擦リ消シ裏カラ紙ヲ補ウ。
下ノ部分ヲ擦リ消シ裏カラ紙ヲ補ウ。

折山ノ部分デ紙ヲ継グ。

おなし野の露にやつるゝ藤はかまあはれはかけよかことはかりも
此巻豎并也

心より外にびんなき事—— 御てうあひの心あらば也
うけい 愜ニのろふにはあらず

思ふ事をまほならずとも—— 有のまゝに非ず共也
女親には何支をも云習ッいなれは也

にび色の御ぞ 大宮の御服也 大みやの御いての事いつの
間ニ欵コこゝまでは何共書マ面白き書さま也

宰相の中将 夕きりなり
こまやかなるなをし こそ色コなり コマヤカ濃

おぼしはなたれじかし 宮つかへの事を源氏おほし
はなたれましい也

そらぜうそこ—— 夕霧なまめき給へり 源より仰
られ事あると虚言をの給ふ也

さてもあやしう—— 夕霧のこと葉也兄弟かとおもへは大
宮の同じ服尤なり心得かたきと也

あらはし衣 服衣を即あらはしごろもと云給へる也物を
あらはしたるなり

らにの花 蘭ラン也 シハニ也 シヲシヲシヲニト云如シ
うつたへに 一向になり

あさきもふかきも—— 夕霧の詞也
頭ノ中将 かしは木なり

人の上になん かしは木の事をの給也

┌ (32オ)

┌ (32ウ)

出たまひて御返など—— 源出給てなり

宮などのれんし給へる 兵部卿宮也 れんしは恋慕也

申給ふ 夕きりの申給也

かたしや 源御詞也何共しかたき也

は、君のあはれと—— 源作り事をの給り

つきくしう—— さ有つべしう仰らるゝ也

けしきのみまほしければ—— 夕霧の詞也

三にしたかふ物かこそあなれど——をのか心にまかせん事はある

事也との給ふ 也足の被仰は咲花之説何と哉らん紛てちと ましき

聞にくし とニかくニ源次第たるへしと内大臣は仰らると夕

霧ノ源氏にかたり給ふ

おもひぐまなしや かひなき也 無曲也

うたかひはをかる 夕霧の心中

御ふくぬき給て—— 八月にぬかせらる九月は祝言ニ忌ム

頭中将も中く—— 柏木なり 月也

なにかしを—— かしは木の詞也

たえぬたとひも侍るなるは—— 兄弟の事也

こだいの事なれと ふるき事なれと也

まいり給ん 大裏へ

いつかたにつけても—— 前の好色かましき文の事と今

又兄弟の事と也

まばゆくて

何事もわりなきまで——

玉鬘ノ心中を宰相ノ

┌ (33オ)

┌ (33ウ)

君の云つたふるなり

かくごん 奉公の心也 猶咲花ニ委 格勤カウジン

大將は—— 何事も右のつかさ也

さるやう—— 内大臣ノ心ニ源氏の蜜通あるかと覺すなり

東宮の女御—— 母女御也

弁のおもと 髭黒の媒也

哥かすならば—— 人かすならばと也

哥朝日さす—— 目を天子にたとへて読り

打あひたるや 紹巴説も花鳥に同しおもしろからず 也足

御説は御使さへやうだい以下兵部卿宮のに似合しきと也

心を付て見へし

葵 衛テイ足アライの葵ト云事あり 引給へり

女の御心ばへは此君をなん—— 是は筆者ノ詞也

(五行分空白)

(白紙)

(白紙)

真木はしら

卷名歌を以て号せり 今はとて宿かれぬとも馴

きつるま木のはしらは我を忘な 此卷豎の並也

源氏卅七八歳の事なり冬ヨリ明年秋ニ至ル 此卷の始ニ

玉髻ひけ黒の室ニなり給ふ心見えたり

(一行分空白)

うちにきこしめさん事も—— 花鳥の説よし可用之

┌ (34才)

┌ (34ウ)
┌ (35才)
┌ (35ウ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

心浅き人の—— 何れの説も如何く 風流にもかまはず只

一心 = 正直におもはれたるを心あさきと云る也

わか殿に

ことつけて かこつけて也 源の御方 = 置度思しめして也

心ゆきて—— 風流 = なる也

おもひむすほゝれ—— 鬚黒 = 心付給す

殿もいとをしう—— 源氏なり

ころのくせ 心の曲 人の疑んとおほしめしなから也

すくよかなる尋常の人 ひけくろの事也

わたり河 是はたゞ渡る川と見てよし

みつせ川—— 是は又本ノ三途河と見へし玉かつら本の三つせ

川によみ給り

よきみち きもし清濁いつれにても其内清は猶可然

ならひ給ぬ心地に ひはいなり紛らはし

女君人にをとり給へき—— 鬚黒の室也紫上の姉

人きゝやさしかるへし 恥かしかるへし也 何をして身

のいたつらに老ぬらん年のおもはん事をやさしき

玉をみかける目うつしに—— 玉鬢ノかたのめうつし = 也

まかせてこそ—— 堪忍してこそ也

かうじ 勘当

宮の御事をかるくは—— ひけ黒のことは也

こゝには—— 吾はと云心也 真木柱のうへの詞也

もてない給んさまを—— 鬚黒の吾にあたり給んさま

「 (36才)

「 (36ウ)

を見んとま木はしらの上のゝ給也

心かろきそや　　そもし清濁いつれにても

さふらいに　　男女に限す

御ぞたてまつりかへ——　　めしかへたり

ひとりゐて——　　もくの君か哥也

いといたし　　ちとほめたる詞也

うき事を——　　ひけくろの哥なり　　玉鬘ノ心を

うき事とよめり

すほう　　すもし清々

兵衛督　　玉かつらへ前ニ丈をやりし人也　　真木柱の君の兄

かたのやうに　　形の如ク也

今なシとも聞えて　　なんと読給り　　てもし濁ル

ひはだ色——　　檜枝色ノ紙　　紫のいさゝか黄はみ黒キ色也　　真木

はしらニよせたり　　真木とは良木ヲ　　云也良材は檜木なるへし

浅けれと石間の水は——　　石まの水はもくをさして読り

おほきおとゝ　　源し也

女御をもことにふれ　　冷泉院の女御也真木柱の妹

のをれふるし給る——　　玉鬘は源の实事ある跡ト真木柱ノ

母君の云り　　河海の句切も紹巴句切も同前　　給へると云下ニ

朱点の句切ありいかゝ　　いとしみにとある下に句切ありて

然るへしと素然は仰られ候

つれなうて　　しらぬかほして也

きのさしぬき　　綺はから綾なり

┌
(37オ)

┌
(37ウ)

あやしき事ともを見ずぐす 見て堪忍なり
たいめんし給へくもあらず 北のかたの

┌ (38オ)

つみさり所なう つみのかれぬやうにとなり
かたき吏なり 難儀なる事と也
なめく 無礼の義也

としかへりて 源卅八歳

承香殿 シヨキヤウケン 何れにてもくるしからず 此女御鬚黒ノ妹

玉かつらのこしうと也故_ニ是の殿の東_ニ玉鬘ノ御局あり

この大将 鬚黒なり

宰相中将 夕きり也

官の女御 紫上の姉式下卿の御女_メ

春宮の女御 春宮の御母義の吏也鬚黒の妹なり

宮はまたわかく 東宮の御事なり

大将殿の太郎きみ 鬚黒の太郎君なり

とのゐ所に居給て 大将のとのゐ所也大裏にての御座あり処也

こよひはあまり—— 今夜御帰はあまりなる御事と也

つかさのみさうし とのゐ処也

深山木に—— 兵下卿宮の哥なり 紹巴説は大将を大樹といへは

なりそれ迄もなしたゝ大将をこなしてよみ給也_{素然御説也}

あやしう—— 主上の御こと葉

悦なとも—— 内侍_ニなる事也

かゝる 位の添事也 加階

いかならん色とも—— 紫とは加階したる事也奉公もな

┌ (38ウ)

きにとの心なり

そのいまより—— 主上の御詞也ぬしなき時に参

給てこそとなり

うれふへき人あらは—— 吾道理かそなたの道理か人

いはせたきとの御心也

むつかしき世のくせ—— 世上のおとこのくせと也

いだしたてぬ人もぞある あらうずると云詞也

たゝかばかりも匂ひこじとや 香斗なり

ゆるされあるましき—— 内大臣も源氏も御ゆるし

有ましと也

さばかりの事も—— 今迄何事も云ぬにと内大臣ノおほ

宮にもさこそ—— 式部卿宮也

うたかた人を忍はさらめや 落居しのふと云心の歌也 うたかた

とは或寧^{ムシロ}或争^{イカテ}或^{シバシ}の心なり 巴説同支 此哥にてはしはし

の心也 此やうなる所置こと葉也

よづかずぞ 尋常^{ヨシナ}ならぬなり

さまし侘て まぎらはし侘て也

御琴かきならし—— 玉鬘の和琴稽古の事

おもひ出し給り

かほにみえつゝ 面影ニ見ゆる支也

かりの子の—— 巴云卵のやうに御菓子ニ作りたり

鴨の子也かるの子共云五音相通也

かへりしかひ かひを破たる事也

「 (39才)

「 (39ウ)

「 (40才)

すがくれて 巢^ニかくるゝ也 卑下ノ哥歎

ほけしれて ほけとはほれたる心しれは痴也

若き御心の中に 真木柱の御むすめ也

十一月にいとおかしき—— 昔の抄共多誤^ル時節相違也

此巻の末に近江君の事ありそれは秋の事也十一月ノ事は

爰に先書つゝけたる斗なり

このわか君のうつくしきに—— かしは木の心中

おほやけことは—— 公役也 職なり 咲花の二抄^ニ委^シ

あふなき事 無^レ奥

棹さしよらん 近江君の方よりさしよらんと云り

はしたなかンめりとや あまり引きりたる御返哥と云心也

とやとは人にはせたる書様也例の筆法也

(十行分空白)

追

名残なき御もてなしは 北方の現心うせて又乱心ノ事ある

を名こりなきもてなしと云り

見たてまつる人たに—— 髻黒の心也御道理く

まみいといたし 草子 ほめて云たり

されといかなる心にて—— 事よ もくの君の心也 又は草

子と見てもよし

中く心やすくはおもひなせと 鬚黒の心歎 北のかたの父宮ノ

方へ歸給は心安くはあれ共ト也

さてもかたすみにかくろへても—— 北の方ノ心はおだ

しう

┌ (40ウ)

┌ (41オ)

心易くあるをと也

あなわるやといふを—— そこにある女房達などの云る

この比はかり心の程をしらて—— 鬚黒と玉鬘ノち 也

きりはまだ此ころの事なるに疎略のやうにては云なしては

源しも致仕のおとゝも如何おほさんと也

うちにもきこしめしてけり—— 主上の御心也上も玉鬘へ

おほす心ありしを何とて宮つかへをはさせ申されぬそと

少し御心懸給にや 林造

すくせことなる—— 人の縁は定たる変なれとも也大将と

玉かつらとちきりふかきとうちにもおほす也

かけくしき—— 内侍督ニなしておこなひをと斗の御心と

也御門の玉鬘ニ心はかけじとの御心也かけくしきとは

くしき心もある歎 爰はなま情かましきすちを云 見え

ことに乱かはしき—— れきくなる更衣もなき也 休にや

(一行分空白)

御さまなり 双紙也

奥津舟よるへなみ路に—— 近江君の哥也 夕霧ノ

雲のの鷹をおもふ事心ニ叶すは吾によれと也そなたへ

棹さしよらんとなり夕霧ニ心をかけたたり 林

たなゝしを舟こき帰り—— ほり江こく棚なし

小舟漕かへり同し人にや恋わたるへき 近江君の詞也

夕きりをかく思ふとなり 林

あなわるや—— 雲ののかりの心ニかなはぬを強て夕霧の

「 (41ウ)

「 (42オ)

「 (42ウ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

申給ふはわるき御心と云意也林 たなゝし小舟も雲ゐの

鷹一葉の事也あなわるやとは哥の卑下也一葉

この御かたには—— 御女御の御方にはかゝる人はおもひも

よらぬとなり夕霧の心ニ近江君の事をかくおもへり

此きく人もけりと—— 夕霧の思案して近江君と知

よるへなみ—— 夕きりの返哥也舟人は近江の君を給也

云にやいかに風のさはかすともおもはぬかたには寄ぬものそ
なり

(三行分空白)

(白紙)

梅か枝

以詞卷名トせり 梅か枝は催馬楽をうたへる事也 源氏卅

九の正二月の事見えたり

(一行分空白)

東宮—— 今上也 源氏の御掣なり冷泉院の御次なれ

共御子には非ず

大貳 太宰大貳任五ヶ年也されはすまの巻ニ云る大貳には有

へからず 又其時大貳の奉れると云儀もあり 也足仰らる

何れにても有へし 帥ト大貳ト同夏也されとも其中ニ帥

は賞翫也筑紫九ヶ國をしる徳ある官也

ひこんき 今の世の錦蘭欵その時代ニきんらんと云名を日本ニ

いまたしらさる欵

そんわりの御いましめの—— 古説多し然れ共曾王ソウしかるへし

折山部分デ紙ヲ継グ。

┌ (43才)

└ (43ウ)

┌ (44才)

おゝぢなんとは曾祖父と云其類なるへし人の子孫など其

曾孫といふ前後ニよらすその筋ヲ曾と云 休逸ニ云せんト書

てぞうとも読へし

こゝろば 物のかさりにする物也 はもし濁ル

ちりすぎたる ぎ文字を濁る人もあれ共わるし過ノ字ニ

あらず 透の字歟

哥 うつらん袖に浅しまめや 明石姫石を祝メ読給り

うちの事 文の中也

くまぐしく—— 何事ぞ有ふずると思し召は迷惑ト云心也

まめやかには—— 是を文章とみる人あれ共其はわるし

いとみにくければ—— 明石ノ姫君の事を源の卑下して

仰らるゝ也 かく

此夕暮のしめりに 雨の暮也

ひげし給へと 卑下

かぎ合せ—— 清濁何れにても 紹巴は濁ル

荷葉 カヨウ かやうニ読給り

前の朱雀院 ネズ 也足仰らるゝは花鳥説如何河海ノ説しかる

へし是は寛平たるへし 年代記ニ朱雀院とあるは承平ノ

御門なり

ヒキク 百ぶのほう ふもし濁ル

あすの御あそび 御もぎの事也

うちならし 内々のならし也

げざん—— 名はかり申上て帰るを云り尋常ニ云には

「(44ウ)

「(45オ)

かはれる也 是は御目に懸る儀ニあらず

^哥ふぎやよるへき よるましいとの心なり

^哥ねくらの鳥もほころひ—— 鳴事也

花の香をえならぬ—— 薰共タキセノなるへし

御車哥かくるほとにをひて—— 牛ニ車をし懸る間ニ追て也

めつらしと—— 源氏の御哥也

宮は見たてまつれ給 秋好なり

なめげなるすかた 裳をきぬ姿也慮外のすかた也

此御かたは—— 明石ノ姫きみ也

いとおほくさふらう 道風佐利なとも有へし

とよりてこそ 外トよりてこそとは近年こそ也 奥ワウよりとは

。むかしの支也 抄共ニくはし

さゝめきて—— さゝやく事也

院の内侍—— 朧月夜の内侍也

こゝにとこそは 紫上なり

まだかゝぬ—— 書ぬ也 昔は捨て後に書と也今は本を

書て後ニこしらゆる也

けしきばみいますかりとも元かきならべじや 此やはやは也

兵衛督 玉鬘ニ心よせし人

あしでうたゑ 河海花鳥ニ大かたは注したれ共能はしりかたし

芦手とはあしの葉のなりニ似たる文字の姿欵中峯ノ筧ノ

葉やうなと云かことし 也足仰らる何共知らざる事也

字の形の事を云たる事ト聞えたり

┌ (46才)

┌ (45ウ)

削り消シノ痕アリ。

けうそく——むかしはつくえなし

けちえんなる 掲焉 あらはなる事也

うるはしだち——念比^ニ也御礼也

そばみたる 非^レ正 風流かましき哥也

かゝる御中に——源氏の詞^ニても兵^口卿ノ詞^ニても相違有

へからさる也猶源しノにして可然とそ

なごう 和^{ナゴヤカ} やわらかなる心也

いたはりくはへたるけしき也 筆勢よはき事也

さかの御門の——弘法大師とあらそひて書給ふ御手也

おほとなふらみしかく 切灯臺^{キリウダイ}といふ物ありその支也又其^レニ

対して高灯臺^{タカ}と云もあり

姫君の御ありさま——雲ゐの鷹也

かやうの事はかしこき——源氏の詞也

しり^ビ 後かれなる儀 哥の下ノ句のわるきをもしりび也ト云

いはけなくより 源し我事をの給り

さるまじきことに——無用之事^ニなり

かたかど 一角也

あやしと打をかれす——花鳥^ニ委^ッ心を付て見へし

(四行分空白)

追

とりあへぬまで吹やよるへき 常^ニいふ心坎やかて其儘なと

と云様なる心也

あしでのさうじ 葦手ノ草字

┌ (46ウ)

┌ (47オ)

是はいとまいりぬへき—— 中宮へ

女でのうるはしう心とゝめて 源氏おんな手のやうをあ

そはすとみえたり前ニあり女手を心ニ入れて習し 如此

四五丁前ニあり

うへは東の中のはなち出に—— 上は紫上也此所にて合せ

給り 放出 右物語ニ云るは皆々六条院の事也爰までは

放出は南面の母屋と見えたりそれに西のはなち出といふは

西の対の放出と云心也此卷の東の中の放出といふは東対

のも屋也中ト云は母屋と西東の廂との間ニ障子をたてゝ

隔たれば御帳を立たる所を中ノはなち出とは云也紫上ノ

合せ給ふ処は六条院の東の対のはなち出なり源もこの時

寢殿にはなれおほして合せ給よし見えたり是は西対の

放出にてあはせ給也紫上のあはせ給ふ所は各別也又若菜まい

りし西の放出といへるは西の対のはなち出なりかれこれ

取合せて了見すへき也六条院ニは対ノ屋ニツあると見えたり

御しつらひ—— 風などを入すして薰物合せ給り

すゝみをくれたる—— すゝみをくれたるとはにほひの花

やかなるとしつめるとの事也同し二ツの方なれば只いさゝかの

かはりなるへし何が過て何が足ぬとかぎしる事也林逸

筆の掟すまぬ心ちしていたはりくはへたるけしき也——

文字をなをしたる也けつらふて書たりつくろふたる様也

女のはさほにも—— 女房衆の書たるはいつれも取出

し給す

┌ (47ウ)

┌ (48オ)

折山部分デ紙ヲ継グ。

侍従に唐の本—— 螢兵衛卿の御子なり

┌ (48ウ)

段のからくみ—— 段々に組たるひも也 一寸まだらのことし

(十行分空白)

┌ (49オ)

(白紙)

┌ (49ウ)

藤の裏葉

卷の名詞を以号す 藤のうら葉のと打誦し給トあり

源卅九の三月より十月迄の事見えたり梅か枝の同し年なり

(一行分空白)

ねんするもくるしう 物をこらゆる事也

うへはつれなくて しらぬ顔也

とりあつめて—— 何事もよく足たり

中哥くに—— 安々と御ゆるしあれば却而まとはんとの哥也

御心おごり—— 草子

なをしこそあまりこくて—— 年老次第ニうすくきる也

此義花鳥に委あり可被見

┌ (50オ)

さえのきは さもし濁ル

色もはたなつかしき—— ゆかりの心もあり又は紫を女ニ

比する心もあり

文籍にも家礼—— 上ウヘを文籍ブンシヤクとよめは家礼カレイ 文籍モンシヤク

とよめは家礼也 古抄ともに委し家礼とは親かたを

うやまふ事也

なにかしのをしへも—— 儒の師を云へし 色々の

説あれ共却て如何くと素然仰られたり

折山付近デ紙ヲ継グ。

御かはりにには—— 大宮又は葵上のかはりにと也

御ときよくさうときて 是は時宜仕合の事也

もてなやむ—— 酒をいたむ躰なり

紫にかことは—— 女を比して読り

姿より過て 松よりあまる也 待の字ニ兼ねる待佐て愁ト也

たをやめの袖に—— 雲のかりをさして

年へにける とどろけると本ニうたふへき事なるを年へにけると

うたひ給ふは祝言によりて也

中寝花の陰の旅ねは—— 旅寝はかりね也雲の鷹の

所へ道引せんはいかに有うするそと云心也

少将のすゝみ出しつる—— 弁ノ少将也此前ニあしかき哥ひし人也

河ぐち 伊勢の名所 浅名をいひなしける 内府の名をいひなかさ也

朝い哉な—— もりにける—— 守ニ非す 漏るゝ也

人わるくかゝつらひ心いられせで——

こらへて奇持と源氏ほめ給ふ詞也 夕霧の此間見事

おとゝの御をきてのあまりすくみて—— 始あまりきひ

して跡よはなるを世間ニ評判すへしそれさありとて慢しく

給なと夕霧ニをしへ給り

さりとても さありとても也

わさとならねと情たち給ふわかう人は——

夕霧の自然心を

かけ給ひつる人くゝなるへし

┌ (50才)

┌ (51才)

あせちの北方　もと内大臣の北方也雲の鴈の実母

みあれ　賀茂の御生わけいかつちの神の御誕生の日也古抄ニ

御車井はかりして——　紫上の御独あるきは此度か初メ也委シ

前々は皆源しもろとも也

残りとまれる人の——　夕霧也

宮はならびなき——　秋好なり

こん多つかさの使　まつりの使也

かの大殿にて　内大臣也

なにとかや——　葵と云によりて也

おり過し給はぬはかりを　折を過し給ぬ也

はかせ——　抄には葉風とあり　素然仰らるゝは只

博士しかるへし

北の方添——　紫上なり

かの御うしろみや——　あかしの上也

その夜は上そひて——　同車也

人にゆづるまじう——　紫上のことは也実子ならば

明石のやうには人にえあつけまいとおほす也

たゝ此事一ツをなん——　紫の実子にておはしまさぬ事を也

あかぬ事。なく——　不足なり

立かはりて参り——　此時はしめて明石上と紫上と御対面也

是ものもの字に心を付て見へしあかしの姫君にと云心あり

御輦などゆるされ給て　花鳥の説わるし是は紫上の事也

心をよはぬ支はた——　明石上の事

┌ (51ウ)

┌ (52オ)

宮もわかき御こゝちに 東宮なり

いどみ所 つとひどころ也

うへもさるへき折ふしは—— 紫上也

あらまほしく—— 有たきやうニ也思ひのまゝなとゝいふ様

なる心也

心からなれと世にうきたるやうにて—— 夕霧の心から

なれと也雲あのかりの事也 是源氏の御心中也

ほいもとげなんと 御出家の事也

中宮おはしませは—— 秋好中宮

司かうふりみなそひ給ふ 御内の人々迄も也

例をあらためて 清濁いつれにても有へし

院司。 司もし清々

いつくしき 殿重のさま也常ニ云にはいさゝかかはれり

うちにまゐり給へき事—— 太上天皇になり給ふニよりて

也前ニ相人の申たりし事今爰にて合也

浅き色わく—— あさきをあさきとかりて読り

さうし 曹子

心をやれる なくさむ事也 心を遣ぢ

むかしおはさひし おはしましゝ也

中納言もけしきことに—— 夕霧也

かみさびたる事 古めきたる支を云

したりがほ—— ちと慢したる様なるかた也常ニ人の云ことし

朱雀シメぬん いつれもよし

┌ (52ウ)

┌ (53オ)

┌ (53ウ)

ぜん上をしき 軟障

わさとの御らんとはなけれど 態の字に心を付て見へし

御座ふたつ 帝のと源しのと二つなり

きたのに 北野也

右のすけ 是も則少将也

紫の雲にまかへる 太上天皇比して読りほめて也

みしかきものともを 楽のみしかきをなり

うたのほうし 和琴の名也 寛平の御寵愛ある器

なるによりての号なり

かはらぬ聲 久く楽をきこしめさぬ也

うらめしげにそ 朱雀院のわか御代にはかゝる行幸は

なかりしとおほしめすなり

ひとつものとそ見えさせ給ふ 冷泉院と源氏

とよく似たまふ事をかく云也

(八行分空白)

追

くちをししくこそおくしにけれとりなをし 林逸哥を頭ノ中

将引なをし給へと也 是は夕霧ノ心詞也

御ともにこそ 頭中將の詞也夕霧の御伴を申さんと

わづらはしき 夕霧ノこと葉也頭中將はことくしき隨身と也

さもすゝみ物し給はゝこそ おとゝよりすゝみ給はゝと也

前に源よりの給し支を承引さりし恨をかくの給也内大臣

をとつれによりされはこそと源の給也心おごりし給也妬げ

┌ (54オ)

┌ (54ウ)

折山部分ヲ紙ヲ継グ。

なりは双昏ニ云 又は夕霧ノ心おこりを云休 けうなきとは

不幸也一葉 孝なかりし也一葉 無レ與なり 其心も

なきと云心也尋流 とげめ 遂べき也 けもしにこりて読む此

時こそ遺恨をもとげめと也又は解めとも注せり

おとくすき御なをし—— うす花だ也 白き御ぞ

とはかさねのきぬ也花鳥

宰相殿はすこし色ふかき—— こき花田なり花鳥

丁子染メは下かさね也同 白キあやは爰の綾也 唐めき
たるにてはなし たる

中くさしも曳つゝきて 紫上れきくならんと

おもひて各斟酌にて参り給ぬ也

まだいとけたかく 又也末ニてはなし 紫上を明石上見給也

かうまで立ならひ聞ゆる—— 明石上吾むらさきの上にと

らぬ躰なり

御て車なと—— 紫上の事也 身の程なりとは紫上ニ輦

のゆるしありて出給ふを見給てあかしの上の身の程を思給也

おもひくらふるは明石上の紫上と我身と也

ひとつ物とぞみえさりける 引哥ニうれしきもうきも心は

一にて分れぬ物はなみに也けり此歌ニ嬉しきもうきも同

しやうなるとあるを爰にて嬉キ事はかりにて憂事はまし

らぬと云ンとて一ものとそ見えさりけるといへり

大かたのよせおほえ—— あかしの上の哥也事

なき人のかけたに—— 林逸雲るの鴈の哥也つれなくてとは影

┌ (55オ)

┌ (55ウ)

のみえぬを云り心をやれるとは懃む事也水も心をえたる類
なり休 又つれなくてとは不変なる躰也心をやれるとはさら

と流るゝ躰也沅湘日夜東流去不為愁人住少時 此心ニ似たり
又引哥なき人のかけたにみえずやり水のそこはなみたにまか
せてそみる いさら井は八雲御抄ニ云出る水也浅クなかるゝ
水也 そとしたる水なり

かほすこしあかみて—— 二所ましますを恥給也

此水の心たつねまほしけれと—— 林逸手ならひともを見給

その心をも尋へけれ共尋れは夕霧と雲ゐのかり

との中にて斟酌の由也 こといみとは前の哥それは昔

を忍哥ともなれは我はか様の事しん酌と云儀なるへし晁

哀傷の歌なれはこといみしてとの給なり

(一行分空白)

わかかな上

此卷ニ女三宮裳着ノ事アリ 三月十日
余あかしノ中宮御産之事アリ

卷名哥并詞を以て号せり

小恠はらすゑのよはひにひかれてや野へのわかかなも千代を摘へき

此卷ノ始は源氏卅九の冬より四十ノ年又暮て四十一の春まで

又上下をわかつ事は此物語に此卷はかり也花鳥ニくはし可見之也

(一行分空白)

朱雀院のみかと是は承平ノ御門に比してみるへしもとより

の朱雀也

春宮をゝきたてまつりて 除て也

たかき位にも—— 后にも也

┌ (56才)

┌ (56ウ)

うらみたるやうにてうせ給にし 藤壺の御夏也

朱雀ノ御代ニ遂ニ后なし

こなたかなたかろくしからぬ—— 髻黒や又源氏など也

女御にも心うつくしきさまに—— 女三宮の継母承香殿

の女御也

今のうちの御事 冷泉院の御事也

このみちのやみ 子道

大小ダイセウ

かくおほやけの御うしろみを—— 源氏の心中を夕霧の申給也

二十ヘタチ

うるはしだちて 實くしき也

つぎくの子の 次々の子也 夕霧ノ夏也

権中納言の朝臣 夕霧の事也 中ノ字濁ル

女のあさむかれんは—— たばかれん也 此詞の次手ニかんの君の事御心中ニあり

此御うしろみともの中に—— 女三宮の御後見也

みこたちはひとりおはしますこそは—— 内親王は夫を持

給ぬが本なり

すぐせ定かたく—— 男女の道は尊賤さためかたき也

それにことよりて—— 紫上へよりきのやうにしてゐる人

もあり

すゑの世にすぎて 末世に似合ぬ也

なにかしの朝臣 左中弁なり

┌ (57オ)

┌ (57ウ)

┌ (58オ)

あかぬ事 不足の支也

限なき人と聞ゆれと—— 是もめのとの詞也前ニつゞけて

いふ詞也

よづきたる—— 夫婦の義定たる事

心をたてゝ—— 男なくして実／＼にしてみる事也

ありへて—— 経て也 親にしられずしてぬけて出なと

後に能キ幸にあふ事なとも有もの也然共それは女のきず^{して}也

心よりほかに—— 不慮ニなり

大納言の朝臣—— 誰とも不見

右衛門ノ督 かしは木なり

かきりぞあるやと—— 今すこし位ひさしと也

めしよせられたらん時 聳ニなる事也

藤大納言 先ニ云ル大納云也誰共委しらす

親さまに—— 御忍の心なり女三を御子分ニしてと

云心也

世をさらんきさみ—— 源し隠居の時の事を兼て

の給り

まづの人／＼—— 大裏へ先々参り給へる女御などの

事なるへし

このみこの御母—— このみことは女三の宮

かへとの かゑと読也 柏梁殿也 朱雀院ニ有御殿の名也

うち春宮の—— 両所なり 内東宮ノ殿上人以下残すと^{云事也}

尊者の大 臣 惣而客ノ中の長を尊者ト云也こゝも其儀也

┌ (59オ)

┌ (58ウ)

宮の権のすけ 秋好中宮の権佐なり
の給せつれど 此どもじに心を付へし さしなからの哥

女三ノ宮の事ニ少しもかゝはらず 朱雀ならては此歌の
心しり給はじ

こしらへかね給て だだめかね也
なきとよむに

此かたのほいふかく 源氏御出家の事也
ゐんも物心ほそく 朱雀ゐん

おもひをこして 思ひ起
まほにはあらぬ—— さしにさしては仰られす

あふきゝこえさするを—— 也足ハワウギト読給り 後來
三条殿ニ尋候へはアラギト読てもくるしからすと仰られ候

何心もなくて—— 源の御心中なり
をのがどちの心より—— 女三の心よりにてもなし又源氏の心
よりにてもなし

聞え給へる人—— 女三を心ニ懸奉りし人々也
正月 ムツキ

左大将の北のかた 玉鬘なり
らてむ 貝をすりたるを云り

末ノものもよほしになん 子孫たちの成人の事を云り
せめてをとらび—— せめてはしるて也

式日卿宮はまいりにくゝ—— 元の髯鬚黒のとり行
給ふ御賀なれはまいりにくしと也

┌ (60オ)

┌ (59ウ)

御むまこの君たち 式部卿の御孫也玉鬘のまゝ子
琴は兵^{サシ}口卿宮 きんとよみ給り

ぎやうでん 宜陽殿

世を捨るやうにて—— 何事にもかまはずして暮し給事也

わかなまいりし西のたい—— 玉かつらの若菜まいりし所也

うちに参り給ふ人の—— 入内の事なり

むこの大きみといはんにも—— 草子の地也

又ならふ人なく—— 紫上也

おひさき遠く—— 女三宮の支也

物のはへなき御さま—— あまり何心もなき御さま也

御ぞともな^ンといよ^くたきしめ—— 源氏のに紫上焼給ふ

おこたり 是は過怠也

定なき世の常ならぬ—— 定^メたる契と也替らぬ契

ち^ミきり也 定なき尋常の契にては無と云心也

こなたの御けはひにはかたさり—— 紫上には所を^く也

此みやのかく—— 女三宮なり

猶わらは心の—— むらさきの上也

おもひはなれたる人^くは—— 花ちるや末摘などの類也

源氏疎略の御かた^くなり

かの御夢に—— 源の御夢ニ紫上みえ給也

しん殿には御せうそこ—— 女三宮へ

宮の御かたに御文—— 源より女三へなり

こゝろみたる^くけさの淡雪 雪ニ心みたる^くと也

〔(61オ)〕

〔(60ウ)〕

はかなくて—— 源氏の御心定まらぬを云る也 誰にも

あれ女三の御代によみたるたるへし

老しらへる

打けさうじ給へる—— 源ノ御事坎又は女三宮の御事坎見

分かたし何れにてもくるしからず

おゝしく 男しい也

むかしの心ならましかば—— 昔の好色心ならばと也

さしならびめかれず—— 紫上の事也

尋給ふへきゆへもや—— 女三宮と紫上と母方のいと

こにておはします事也

やみをはるけで 子をおもふやみ也て文字濁れり

中納言のきみのもとに—— 和泉か兄弟也隴月夜の

内の人なり

心とはんこそ 夢庵の哥ニ雲の色風のけしきに詠め

ても心の間はゝいかゝこたへむ

いにしへわりなかりし世に—— 源氏の御詞

びなきを びんなぎと読給り

たきものなとに心を入れて たきしめ給事也

引うこかし給ふ 中の障子なるへし障子とはふすま障子なり

行あふみちは—— 道也

ほとへても見たてまつるは 間ダありて也

心なからも—— 源しの心なから也

関もりのかたからぬ 隴月夜の君の心を関守と云り

┌ (61ウ)

┌ (62オ)

かたらひをきて—— 再会を約する也

さばかりならんと—— さうあらん也

むかしを今にあらためくはへ給ほと—— 昔を今ニとは驪

月夜の事改メ加へとは女三の御事也

何事もえのこし給す 何事も皆く仰られ頭はず也

身のほとなるものはかなき—— 親の合せぬ縁の浅を

の給へり 又花鳥の説は別也如何

水鳥の青ば おもしろし心を付て見よ

東宮の御かたは 明石の姫君也

むかしの御すちをも—— 御ゆかり也

女三宮父御門の

御出家ありし事也

内々にもさなん—— 大りにもなり

ぢす 経を裹む物也 今の文巻と云もの也 帙

ゆだけき たもし濁ル

御ぞのつくえ 御衣の机也

御ずぎやう

皇一聲

古入道のみや 薄雲ノ女院也

中宮まかしてさせ給て 秋好なり

御幸なども有へく—— 冷泉院源氏の御

かたへみ幸あらんとおほしたれと々也

四十寺 読給り

┌
(63オ)

┌
(62ウ)

下ニ「月」トアリ書サシカ。

四十賀 シツガとよみ給り

大きやう 大文字清給り

宮のおはしますイテ—— 秋好なり

一のもの

中納言にそはさせ給てける 夕霧に内より仰付らる

うちとは冷泉あんなるへし

比おとよそ今さかりにて—— 大政大臣也 宿植徳本

衆人愛敬—— 観音経引之給り

うちの御手—— 主上の宸筆なり

六衛府 ロクゴフ

御車にをひて—— 太政大臣への御をくり物也

一院 朱雀あんな也

大将のたよひとり 夕霧なり

かたはらなきやうに かたわらと読給り

こなたのうへなんし給ひける 花ちる也

三条の北の方 雲あのかり也

こなたにはたよその事に—— 同人也

桐壺の御かた近つき—— あかしの中宮ノ御産ちかつく

御すほう 葵上の御産の事也

ゆゝしき事を見給てしかは 護廠の壇あまたぬる也

ふるめかしき事ともを—— あかしにての事などなり

誰もく心をまとはして—— 入道あかしのうへ尼各なるへし

┌ (63ウ)

┌ (64オ)

かはかりの契にこそは有けれど—— 是まての契也

世はなれたるさかひ—— 世を離たる也

仙人 センシト 読給リ

日中 ニツチウ

御かたまいり給て あかしの上也

よしめきそして 殺 よしめき過して也 又説由めき

存して也

いでまうできつらんばや 爰にて句を切て下をみるへし

はやには心なし

濱のとまやを 明石の入道を尋もみはやと也

世を捨てあかしのうらに—— 世をすてゝ明らめたる人

とつゝけたり

かくれのかたにて—— おなし六条院のうちなれとあかしの

御方や花ちるの御かたなとはちと隠レなり

たいの上もわたり給り 紫上也

まことのをば君 あかしの上也

さらなりや 殊更也

あまがつ 人形のやうなる物也

あしこに籠なん あしことはあそこ也かしこと云も同

やくなうて 無益なり

山の右左ミキヒサリより月日の光—— 月は中宮日は東宮ニ比する也

西のかたにこき行—— 涅槃の舟也

ぞくのかたの文 俗書也

┌ (64ウ)

┌ (65オ)

十萬億の國 阿弥陀經ニ曰從是西方過十萬億佛土有世界
名為極樂

月日書たり 女文には日付をはかぬ物なれ共書たり是
を命日にせよと也

くどくを作り給へ 我かうけん為はかりニ非ず御身ノため

なり善根をあそはせと也

さばの外 沙婆世界のほか也

十四日 ヂウシニチ
ト読ヘシ 十四日廿四日なと云は四の字といみて世上ニ云

事也いはれさる儀也十三日十五日といふにて心うへし十日迄は

よみに云也十一日からは音にいふへし

願文 ゾハンモン 素然かやうによみ給

今はと——残り侍けり 先ニ入道の出家し給し時

かなしかりしか今比かなしさも又残るとの義也先ノ時か

なしさのこると云内に今のかなしさも残ると云心こもる歎

わしの峯をはたとくしからす 常在灵鷲山

とは知なからまとひ給となり

御かたは

いといみしくかなしけなる—— 尼の様躰也

あひみで てもし濁れり

行ききたのもしく 向後頼もしく也爰は後世の事
にてはなし

ひそみ給ふ 啼事也

此文箱は—— 願文共を入れて持参也

みやすん所は—— あかしの中宮也

┌ (65ウ)

┌ (66オ)

虫喰アリ。

たいの上などのわたり給ぬる—— 紫上御かへりの跡
もとより御身にそひ—— 姫君を紫上^ニにて也

今はきし方—— 紫上ノあへしらひをみて心安しと明石上ノの給也

あつこえたり こそし濁ル

御さうじ 障子也

らうじ 領じなり

もやのはしらにかゝりて あかしの上の躰

巻数 ^{クハシ}

まだき願 いまはたはたさぬ願の事也

おこなひまし 増なり

此世にそみたるほと—— 年つみたるは罪障も深からん

と也入道をほめ給ことは也

目のまへに見えぬ—— 先世の事を云り

是はまたぐして—— 源の御詞也 私の御願ともの事也

猶あやまりても我ためしたの心ゆかみ—— さもおもひ

よらす さも。はず也

いかてかゝるにはと—— 人の方からおもひなをす也

おゝくはあらねど 多クはみしらねとゞ也

そこにこそ物の心えて—— あかしの上の支也

なをし所なく—— もどき所なき也

おなしすぢにはおはすれと 女三宮紫上御親類也

立ましるへき—— 明石上わか族姓のあしき事を思へり

ふくぢノそのに—— 入道の事なり 伊勢物語^ニ

「(66ウ)

「(67オ)

富士ノ夏^マなりは塩尻のやうになん有ける 是を定家卿の

勘物ニ云雖為塩事凡下也不可用不^レ心得とて有なんとあり

此事を引給り是ニ同シ

女房なともをとなくしきはすくなく——

よからさるやう躰なり

さこそはあらまほしからめ さう有たくこそあるらふ

この宮は 女三宮なり

と也

たくひなき御身こそあたらさらめ——

位こそ相当せすともと也

静なるすまゐは—— 屯て御くらゐ高ければ御用なく

しつかなり

弁官 是はあそびなどには交らぬ官也

きやう^ふ 輕く かるくしき也

花の上もわすれて心に入たるを 鞠にのみ心を入たる也

らうある心ばへ—— 労功を積たる稽古ノほと見えたり

うちぎすかた—— 女房の白衣^{ヒヤクエ}なり 主人ならては

有ましき事也

から物はかりして かるきさかな共也

花の木にめを付て 女三宮の事

うちとのよろい 内外の用意

ことなる事なくこそ—— 寄特もないと也

大将の君ひとつ車にて 同車也

月の中に—— 當月中ニと也

┌ (67ウ)

┌ (68オ)

春の鳥の—— 鶯の事也

あちきなきものあつかひや—— 色々=かきは木の

云るゝと不審し給也

み山木 = —— 歌 み山木を紫上 = たとへ花を女三 = たとふ

かむの君は 柏木也

心くるしけなる有さまも見給へあまる心もやそひ侍らんと

みつからの心なからしりかたくなんと 侍徒か心に

我ながら鼠負か添かと云也 見給へあまるとは見か

ぬるといふ義也

見もせぬと—— 前の詞にあやなくけふは詠めくらし

侍と書て。とあり是古歌の心也前にこたへて見へし

伊勢物語 = 見すもあらすみもせぬ人の恋しくは
あやなく今日やなかめ難さむ

れいのかく 例の書 侍従返事を書也

いま更に色にな—— 哥 むかしの心をかけし事を忘よと
なり

(九行分空白)

追

御山すみにうつろひ給んほとにこそわたし奉らめ

院の山住にうつろひ給ん時女三をこなたへわたし

奉んと源氏の仰らるゝ也

今みたてまつりてん女御のきみも—— 明石の中宮也

すこしほゝゑみてみつからの御心なからも—— 紫上の

詞也 自の御心なから——とは源氏の御心にさへ定メ給ぬ

事を何として分別すへきそと紫上の給なり

「 (68ウ)

「 (69オ)

「 (69ウ)

御ぞかちに身もなくあへかなり かほそき様躰なり

心やすくならひたる御心地に—— あかしの中宮ノ随意ニ

御座あり来れる御心ならひに御いとまのなきをくるしく

おほし召と也

人々あらはをふともえ見付ぬなるへし 簾中の人々

簾の外へあらはに見ゆるをえしらぬ也

御かさしの臺には沈したむを作り—— かさしは金

を以て花をつくりたるもの也是をかさして老にかくるゝといふ説也

臺は其花の臺なるへしそれを沈紫檀にて作りたり

なげの情 けもし濁々何でもなき情也 又けもし清はなかる

べきと云儀也 暮なはなけむ花の陰かはと云哥は清めり

是はなかるへきかけかと云義なり なげの情とはなをさりの

情也

さしつきにみる物にもか—— 林逸さしつきは中宮の御

幸に女三宮あやかり給へとの心也 物にもかとは哉かもし

猶わらは心のうぬにやあらん—— 源の童心の失ぬ

ほとに紫上も源へむつひ寄々と申給也^林

忝こゝろくるしき—— 女三宮にてまします物を

なり 私恐るゝは心くるしき物なり忝は恐儀也^同

あまりなる御思ひやり哉といふへし 草子の地也^同

いてや此御ありさま一ところこそ—— むらさぎの上の

ましませはそれこそ源氏の御心にしみ給へと女三かたの

女房衆の云る也^同

「(70オ)

「(70ウ)

「サンズイ」ノミデ書キサン。

あしる車のむかしおほえて—— 須戸への折節のやつれ

たる車なと有し事也嘩

もゝちとりの聲もいとらゝかに 此百千鳥と云は何や

聲く霞の中ニ鳴々さまなり林

名残おほくのこりぬらん 草子の地也此詞ニ心多く

こもらんとおもふへき也林

御物語のとちめは—— 源氏のかへり給御心の名残を

中納言の思ふ也林

私あらせまほしきに心を付へし

ちと聞まさるゝ也 残りを悉々聞たきをと云心也

かう心やすからぬ—— ひきつみ—— 源の紫上へ申給也

御はくゝみおほしゝりなから—— 中宮を源のはくゝみ

給しを思ひ給也林

ちゝ宮母御息所のおはせまし—— 秋好の父母の

事也御存生ならば源の御志の本とを悦給へければ其御志迄

を取そへつくし給となり一葉源しの御賀をさせ給ふへき

をと也 父母ましまさはその御賀をさせ給へきを

さ。なければ源氏を父母になすらへて歎嘩

(八行分空白)

(白紙)

若菜下

此巻の初に源氏四十一より四十六までの事あり猶委

事は花鳥にてみるへし

(一行分空白)

┌ (71オ)

┌ (72ウ)

┌ (72オ)

┌ (71ウ)

ことほりとはおもへとも—— 先の卷ニ懸てみるへし
院の御ためになきゆがむ—— 源の御為ニなり

かしは木の心中

左右の大將 夕霧と髯黒と

のり弓 歩射カチニミ 歩射フシヤといふも同し事也たゝ

的をいる事也

こゝしき手つきともをこそ—— 当り斗はいや
也

手前を見事ニと也

我さへ思ひつきある—— 夕霧の笑止ニおもひ給也

女御の御かたにまいりて 弘徽殿也

ろなう 勿論也 ろんなう也

御琴などをしへ—— 和琴なるへし

恋侘る人—— なくねなるらん 猫ニかねたり也足へ如此仰
らるれ共又

晝花の説は鳴音を猫によせて読ると云儀は不用たゝ猫のなく
音とよめり

宮よりめすにも—— 春宮なり

左大將殿の北方 玉かつらなり

おゝち宮 式口卿宮也

北宮のみ心よせ—— 同宮也

大將もさる世のおもし—— 髯黒なり

はゝ君の—— ま木柱のきみの実母

まゝ母の—— 玉髯也

大みや 式部卿宮也

宮はうせ給にし—— 蛭兵口卿宮也

┌ (73才)

┌ (73ウ)

ものしとおもひ給へり 無用とおほしめす

あやなくあはつけきやうにや 鬚黒ノ事の出来たる事

かゝるあたりにて 鬚黒の鞞ニ今兵口卿の宮成給へ なり

はかゝるあたりとは云也

是よりさるへき事はあつかひ—— 玉髻より也

ふる郷に打なかめかちに—— 御里すみ也

つきの君とならせ—— 冷泉御子なくして朱雀の

御子世を継給り

おほきおとゝ 葵上の兄

冠をかけむに—— 衣冠をかへてたゝう人ニ成事也

六条の女御 あかしの中宮也

左にうつり給ぬ 左大将に成給り夕霧の事

姫君 あかしの中宮

みかと御心とゝめて—— 今上也

目をさへのごひたゞして たゞらかして也同事

春宮の女御 前には御かとゝ云り女御は明石の姫君也

この心をはあらはし給す 願文の心をはいひ願し給す

くはゝりたるふたり—— 十人ニ二人加ル

音にのみ秋をきかぬ—— 色にみせたる也 古歌音

にや秋を聞わたるらん 此心を曳かへたり作意面白く

めのみまがひ色ふ 色めく心なり

たゝん帟 たゝうがみと読給ふ

むかしこそ先—— 尼への御哥を見てあかしの上読り

┌ (74オ)

┌ (74ウ)

み門 非^レ帝 門也^モ

神人のカシド かくよむへし 人濁ル

もとすゑ 神楽ノ本末也

萬歳^{マンザイ} かく読へし

神^シだから カンダガラ かく読給り 神宝也

あをにびのおもてをして 張^ツたる歎

ましらはましも見くるしく 明石の入道の事也

入道のみかと 朱雀あんの御事

二品になり給て 女三宮也

春宮の御さしつき ー あかしの中宮腹也

いまははた^マこれ^ミをうつくしみ ー 花ちるの御事

姫君のみそ ー 女三宮の御事

世ちかく ちもし濁給へり 後世の事也

まいり給んつゐでに ー 朱雀御御詞なり

神^シわざなとに ー はぶかると云て也 神事^{カシワサ}

このたいにつねに ー 紫上なり

女^メがく 女楽也

世にあるものよし 管絃ノ上の事

月はた^ムは物さはかしく ー 女楽の支云出す也

よしあるかきりゑりてさふらはせ給ふ 紫上女三宮

へわたり給り

左の大将の御大良君 夕霧の御子也

みたる^ム所 ー むつかしい事そと也

┌ (75才)

┌ (75ウ)

擦り消シノ痕アリ。

はちのをゝたてゝ 發絃ハ箏ノ調子ノ絃也双調ハ以レ三為レ發

盤涉調ハ以レ五為レ發也

らうのほと—— 功を積たる勞ノ事也

ふつゝかに—— 聲のふとくかさある事也賤しきニ

御けはひともを聞見給ふに大將もいと—— 非ず

源氏のきゝみ給に夕霧も内ゆかしく也

あなつり聞ゆ 心安也

此御かたをは 紫上也

ふしまちの月 廿日の月の事月也咲花には十九日と有歎

こくの物とも 曲也

いかにたゝ今—— 是も源しの詞也

そのこのかみ—— 子兄の心也私物ノ功者ト手を子兄ト云歎

人のさえ—— 咲花の説よし

おほえぬ所にて聞はしめ—— あかしにて也

をさくなければ 曾て無へ也

きんなん—— きんの琴也 又さうの琴と云もあり

たゝ琴と斗いふは絃の類の惣名なり

おもだゝしく

上にゆつりて 紫上ニ

りんの手—— 時ニ臨みて引手也

さうの笛ふく君 鬚黒の子也

宮の御さうそく一くたり 女三宮也

ものゝしをこそ—— 源氏の御ざれ事

「 (76才)

「 (76ウ)

いみしかりつる音も—— 紫上ノさうの琴の音の事也
うへはとまり給て むらさきの上なり

手をとるく—— 源氏の御され事

いとかくくしぬる人—— 具 萬事ニ足^{たり}たる人也

紫上ノ支也

卅七—— 女の厄也

君の御身には—— 紫上をさして源氏の御詞也

是は須尸の別の事也

の給ふやうに—— 紫上の語也

さばみつからの—— はもし濁 さればと云支也

打たゆみ かつろぐ也

うちの御かたの御うしろみは あかしの上の事

いとたとしへなきうらなさを—— 紫上のはつかしとの
給也

ほゝゑみてきこえ給ふ 源し御され事也

宮にいとよく—— 是より以前は臨江斎ニ聞是より以

後は末まで透メ 三光院殿の御講尺を聞と素然御物語也

心ゆかせてこそ 満足させてこそ也

人のしのひかたく—— 嫉妬の事也

そなたより聞え給るに—— 女御の御方より聞え
し也

御かゆなとこなたに—— 源氏へなり

御くたものをたに—— 紫上

御賀のひゝきも—— 朱雀の御賀也

かの院よりも 同院

┌ (77オ)

┌ (77ウ)

御す法

宮の御かたにも—— 女三宮也

はやまいり給ひねと—— 大裏へ早く御かへりあれと也

よひの僧 大裏につめてある僧の事也

御心のいとまも—— 源の御心

時の人也 時に威勢の人なり

もとよりしみにしかたこそ—— 女三宮の事也

なくさめかたきをは捨—— 月を落葉宮^ニたとふる

なり其を見てもえなくさまぬと也 我心なくさめかね

つの古歌の心也

小侍従といふかたらひ人 女三の御めのとの女也^ム右衛門督の乳

母のめいなるへし

それはそれとこそ—— 面^ト云心也

それをそれとさしおき奉りて—— おちはの宮を^トきては

誰にと也

あるやうありて物—— 密通の事

ならばしきこえ給しに—— 紫上の支也そだて

あつかひ給し事也

めてたきかたに改め—— 女三の御身上の事を改^メ給へき

事^ニあらぬと也

御身のやつれにかはあらん 御身のけかれ也

せめられ^コうして せめられくたびれて也 こそし濁^ル

齋院にたてまつり給ふ 雇はかし給り

「 (78才)

「 (78ウ)

いとかうしも—— かしは木の詞也

つみをもき心も—— 実事ノ義

ひたふるなる心もこそ—— 一向ニ我をたつる心也

かけくしき事 實支也

今夜にかきりなんも—— 命ノ事也女三をおどし

夢かたりも聞えさすへきを—— 猫の事也いきもの

を夢ニみれば必懐妊するといふ古事ある也其支也

哥
いつくの露のかゝる袖也 此出葉古抄にも説々なり

三光院殿被仰候はかくのことくの袖なりと曳出てと下の詞に

懸テ見るへし 正徹は別ニ了簡あると云伝たり 禅閣はいつ

こそそこらのなと心得よと也 又云ッなりけんと詞をそへて

心うへしと

是はふかき心も—— 女三ノ御事也常ニ御身もちの

かろくしき故に不慮出来也 隴月夜の君此宮い

つれも不慮ノ事は似たれとも惣て御心は支外かはりたる人也

みえをかれし 面白し しもし濁ル

哥
くやしくそつみおかしける 摘置也 罪犯ニ兼てよめり

まさぐりて 落はの宮

おなしくは今一きは—— 柏木の心中

もろかつら 葵ト桂と也

不動尊の—— 死の日数を延給ふ御本願あり

てうせられて 調伏せられて也 調伏はトノヘフスル也降伏は
ヲサヘフスル也

┌ (79オ)

┌ (79ウ)

┌ (80オ)

人のしらさらん事の—— 長生殿ニテ私語セン時有天願為比翼

鳥一有地願為連理枝一長恨寄 此を引給ふ

道ことになりぬれば 生かはる事也

はぶきかくし給へ 省ハツク 鳥の羽をひろけておほふ也

又は畧する心をも云也

身にはくるしく侘しき—— 真言の本意には

少しかはる也如何但爰にてはまつく如此用テ置也

いとをもく成て—— 夕霧の語也

らうろう 取乱シの心也素然御説 おどろく心也花鳥説

世かはりあやしき物のさまに—— 生を替て何たる

もの成給らんと也

御と経トグキヤウ

なきやうなる御心ちにも 紫上の

女君はあつく—— 同人

かくて見たてまつるこそ—— 源氏の御詞也

きえとまる—— 消のこる也

出給ふかたさまは—— 女三へ御出なり

例のさまならぬ—— 懐妊の事也

御文をのみ—— 紫上へ

たいにあからさま—— 御用ありてこそ紫上ノ方へ渡り

給てん

よんべのかはほり よんへと読給り かはほりは今世間ニ用ル

さはかりのいみ—— いみ去事 扇ノ事也

┌ (81オ)

┌ (80ウ)

折山付近テ紙ヲ継グ。

かの君もいといたく—— かしは木也

かくなやましくせさせ—— 侍従か詞也

おこたりたる—— 紫上の事也是も侍従か詞也

さても此人をは 女三宮

めつらしきさま 懐妊の義

うち／＼の心さし引かた—— 紫上の事をいへり

我身ながら はかりの—— 源しの御自称なり

さはかりの人に—— かしは木をさして也

内よりはたひ／＼—— 女三へ

みつから恨めしと—— 紫上ノ詞也 女三の恨ミ給んこそ

心くるしけれと也

けにあなかちに—— 心を静めてよく／＼沈吟すへし

聞にくき所也 晬花ニ委

身もしむる—— 身もしむまるやう也

宮はいとらうたけにて 女三の御躰也

この御心の中しもそくるしかりける 草子の評判也

女御のあまりやはらかに 明石の女御の御事

右のおとゝの北のかた 玉髻なり

此おとゝの—— ひけくろなるへし

この御さまたけに—— 朧月夜の内侍の心也源氏の

御心かゝりし夏也

おもひ出らる 朧の心中

あかしのうらにいさり—— 吾夏にてはなしあかしの上

┌ (82オ)

┌ (81ウ)

故とよみなせり

二条院におはします—— 紫上のかた也 女君とは紫上也

齋のんと此君と—— 権斎院とおほる月夜の内侍との

事也

よくこそあまたかた／＼に 　よくこそ女子あまた

持さりけると也女子は六かしき物そと也源の御詞也

若宮を心して—— 女一宮也紫上の御あつかり也

みこたちなん 女御こ達の事と聞えたり

とさまかうさま 此清濁は天子ノ御説素然へとさまのさもしも

濁て覚ゆと仰らる 何にてもくるしかるまし

六条のひんかしの君に—— 花ちる歌

つくも所 道具など作立る所也

十月カシラキ 如此よみ給へり

姫きみいたく—— 女三宮也

その月には 十月トツキめ也

御山にも

びんなき事や—— 朱雀院御推量あり

見たまふ 朱雀の御文を源の見給り

いと／＼をしく 源氏の御心中也

ことおさなき御心ばへを—— 源の心詞なり

上の御心にそむくと聞召らん—— 朱雀院の御心ニ我そむ

くとおほし召ん事迷惑也不入事なれとも如此申

たゞ人の 只人 と也

「 (83才)

「 (82ウ)

押紙。

ほいふかき道にもたどりうすかるへき—— 　ほいふかき

道とは道心の事也たとりうすかるへき女房とは齋ぬんや

朧月夜やなどに出家をくれ給し事也

曳つゞき 朱雀院に引つゞき也

御心みたし給な 朱雀の御心を乱らかし給なと女

三へ源仰らるゝ也

身にかはる事にこそ 古人わか身ニかはる也

二ノ宮の—— おちはの宮當月朱雀ぬんの御賀をおこな
ひ

て参り給事也

ふるめかしき—— 女三御懐妊にて衰へ給ふ事也

なれくしきかた—— 老給る躰なり

けしきとりしことには—— 猫の時の事也

かの御かたは 花ちる也

色くの病じや 紫上や女三やとなるへし

みこのほうし 法事

いもゐの御はち 御鉢ミハチ

月ころかたくくに 紫の上女三宮などの御事

下らうなりとも 官ひきゝ事を下らうと云り

いかめしく聞し御賀の事—— かしは木の申やうを源
ほめ給り

世の人は浅く—— しらぬ人はと云心也 世間の分

別もなき人の心はと也

物の師などいふものは 道者ミチシヤの楽人也

又くをこなひくはへ給ふ 柏木は舞樂の達者なれば

「 (83ウ) 」

「 (84オ) 」

異見してしなをし給也

四人なからいつれとなく 皆、萬歳楽を舞給り

かすならぬ身にて—— かしは木の心

とまりかたき 此世に也

あまたの中に あまたある御子の中ニ 柏木を取分おもふと也

宮はとまり給て 落葉の宮也

女宮の御心の中をそ—— 女三宮なり

御す經

おはします御寺にも 西山仁和寺ニ 准す又いつれの寺

五十寺ゴジュウシ にもあはれ

(九行分空白)

追

こと更に作り合せたるやうなる空のけしき—— 態と仕合

たるやうなるとの心也

式シキ卿宮もわたり給て 式部卿宮にもとある本もあり然レ

とも同じ義理なりト仰らる

かくおほしまとふめるにむなしく見なされ奉らんか——

此分は紛レなく聞えたり 異本ニむなしくみたて奉らんか

—— 是は源しのおほしまとふ御懇切を空しく見奉んは

かひもなきとの儀也

此人を深くにくしとはおもひきこゆる事はなけれとまもりつ

よく—— 此人とは紫上也 まもりつよくいと御あたり

是は源の御事也源氏にはえ近付すして紫上に近付と物けの云也

┌ (85ウ)

┌ (84ウ)

┌ (85オ)

まもりつよくとは祈禱などの事なるへし

春の琴の音はみなかき合するものなるを――

此事何共知ぬ事也と前より申伝たり 三光院

殿の御抄にも其分也

人のざえはかなくとりする事ともはへありてまさる所
なる―― 源の御詞也院の内を物のはへ有と云ふ也

とりするは取仕トリシハ 是はかなくは假ニもと云心欵
みこたちはのとかに二心なくて――

内へ参せずして宮なとへ参らするにはとおとし給ふ心
いと云ふならばぬ事哉―― 林人を恨ルにも心仕ある

をとしめざまニいふ事などはこなたの誤ニなる事ありヘシ
恨を人の聞おふへからすかやうの心つかひ肝要也と

古郷になかめかちののみおはず 無人の恋しき跡を古云々

さと云り兵日卿の御所にのみまします也
あをにびのおもてをりて―― 林せんかうの折敷

のうへを青にびに織たるものにてはりたる也 青赤也
青丹とは無上ノ丹を云り青丹よし奈良とつゝけたる詞

もその夏也奈良は丹ノ吉処也なら坂より出るとそ
尋流ニもにひ色なるへし 又は尼公の服なれば青純をしく

との義もあり是も理あり 浅香の折敷のしき
物青赤ニ織たるものにや如何 たゞ識て覆たる也是を敷と云り

いひつゝくるも―― 作者の語也 かたい事とは左様には有かた
物也と入道をほめたる語也ましらはましも見くるしくやとき

┌ (86ウ)

┌ (86オ)

云まで記者の語也^{一葉} 入道の源などのまし／＼ける中^二
交らんもかたき支也たとひまする共みくるしからんと也

是は双昏

和琴こそいくはくならぬ——

紫上引給也六弦也日本の

ものなる間譜なと是なし

春の琴の音はみな——

此詞古^キ注にも心みえず或本^二

さるものと琴の音はとありと云々何れにても不審これあり

達者^二可尋^一 しはらく心をやりてみれば春夏は陽ノ氣

うき立心あり秋冬は陰にて心もしつまる時也学問の^{にて}

道にも此心を云る文ありされは春の琴の音は乱るゝ支

なりと云^二やかき合する楽にみたれては如何なるへし

隔句^二云るに也^{一葉}

春の調子は乱るゝ物也それにみな心を

そへてかき合する物をと也^林

私によく聞^二又咲花^一
一儀あり

春のおほろ月夜よ——

林源の御詞なり春を感じる心此ことにはあり下ノ詞^二又秋の

盛を云る也春を先^二ほめをける也^一 春宵一刻——千金花

有清香月有陰引^之

むしの聲より合—— 琴^二虫の添たる心也^林

いとかたき御事也御すくせとか—— 林小侍従か詞也御

すくせとは源氏の御宿世なり

かの院のことに出て 朱雀の御事也

さまたけ—— 源を妨てうはひ給んとおほすかと也

啼のゝしるけはひいとまが／＼し 曲^ガ此字也

「(87ウ)

「(87オ)

押紙。

ふうじこめて上をは—— 別の屋をまつりて紫上をわた
奉也 ふんじ籠てとも読へし何れにても

露はかり打ふくみ—— 含^{フクム} 髪ぬれて露などの有を云也
さほに白く—— すきとをるやうに白き事也其をすき

たるやうニみゆると云也
萬のものゝ音のうちたかひて—— 何れの引物にも

随ふと云ニや琴の徳のすくれたる心なるへし 此こと葉は
心えかたき詞なるへしと云ニ一葉 林逸

(白紙)

かしは木

以詞井哥為卷名源氏四十八の春より秋までの事見
たり

ことし薫ル誕生とみゆ

柏木に葉もりの神はまさすとも人ならずへき宿の木すゑか
(一行分空白)

ひとつふたつのふし 女三宮ノ御事也花鳥ニ委し

おもひをとしてしこなた 爰にて句を切て下をみるへし

哥 いまはとてもえん—— 結れて尚のこらんと也

今日かあすか—— 也足は曳哥にも及ぬとの給り紹巴は哥

を引 是は女三ノ御詞也

人の世の老をはてにしせましかはけふかあすかもいそかさらまし

づしやか

御すほう 先には清給り如何私何れもくるしからざる歌

くまぐをも尋—— いつくをも尋給り

┌ (89オ)

┌ (88ウ)

此ひしりも—— 葛城の聖なるへし

つへたましく あら／＼しき顔なり へ文字濁ル

御しう 御執

むすひとゝめ給へよ 女三の方ニ留められよと也

ほだしにもこそと思なん 女三の御ほたしニこそと也

心くるしう聞なから—— 女三の御文章

残らんとあるは 同御文章也 柏木ノ哥にたえぬおもひ

の猶や残らんとあり其事なり

ゆふへは分てなかめ—— 夕は物哀なるものなれば也

とかめきこえさせん—— 源氏の御事也

むごに 無期 盡期モなく也 侍従かことは也

いちしるきかほにて—— かしは木ニ似んは如何と心苦し

又かく心くるしきうたかひ—— 曳返し女三に似

たらはみたりかはしくて如何かしは木ニ似たるはかりは

却而くるしからすとの義也花鳥の説も咲花ノ説も

わるし 私うたかひましりたるうへにてはと上ノ字を入れて

きけは安／＼と聞る欵

おもひかけぬ事にむかはりぬれば—— 因果目前ノ道理也

うす雲の女院ノ御支

すゑに出おはしたる—— 源しの御末子と云事也

おほやけ事に おもてむきニといふ儀なり

世中はかなきをみるに—— 源氏ノ御詞也

かつ見つゝ かく見つゝ也

┌ (90才)

┌ (89ウ)

をくれ先たつみちのだうり 道理

わつらひ給ふ御さま—— 源の御詞也朱雀へ奏ッ給り
行急遠き人はかへりてことのみたれ—— 若き人は出家ノ
末とをらぬ也

日比もかくなん—— 源ノ御ことは

御そうふん 御所分 朱雀院より女三宮へ御譲なり

つれなくて—— 上には知ぬかほして下ニうらみ給ふ也

世中のけふかあすかに—— 朱雀の御詞なり

いふかひなうおほゆれと すゑたのもしくもないと也

はゞ御息所—— 落葉の御母

右大弁 紅毒の右大臣也

心はへのとかに—— かしは木ノ事也

あたらしと—— あたらものと也をしみ給也

おもくしき御さま—— 夕霧ノ事

すくよか 清濁度ニかはりて聞ッ

月日もへてよ。り てもし濁へし

これかれあまた 兄弟たちの事也

さうけん 讒言なり

いかなる御こゝろの鬼にかは 心からと也

一条に物し。宮 おちはの宮也

手かきこえ給ふ てをふりてをしゆる事也

大将の御かた 夕きりの室

右のおとゝの北方 玉かつらなり

┌ (90ウ)

┌ (91オ)

年比したの心こそ—— 落はの宮との御間の義也

御息ところもいみしう—— 女二宮ノ御母

世のことはりなう 順儀ならぬと也

すぎぐみゆるにひ色 細巴すぎぐみゆるにと句を切て

ひ色とよめり是はわるし火いろと云色あるによりてか様には

読けれ共にび色とよみて可然と素然は仰られたり

こゝ一ところの御心の中に 源の一身也

親たちの かしはきの親なり

をしはかり—— 源氏女三ををしはかり給り

二条の上のさはかり—— 紫上也

恨さへそひて

いとうもれいたき 埋也ソモレイタキト読リ

大将とのゝおはしけるなり 夕霧也

かたしけなき。さまのし給へれば—— 一条ノ宮の母御息所の

物こしに對面あり

誰ものどめかたき世なれと—— 誰か春にして長閑け

からましトアルニなかめてもおもへ我身の夕霞 宗牧付句也

宗碩長點あり此物語の心もおもしろく付たると也足被仰けり

此一巻ノ正筆ある人幽齋へ進上ス其時拜見即某モ写して

所持也

つようもあらかひ聞えまし—— つようツ云むものをと

也御息所の詞也

二三年 ふたとせみとせと読て然へき所なりと素然

┌ (91ウ)

┌ (92オ)

仰らるされと二三ねんと本ニあり如何く

よろつよりも人にまさりて—— 落はの宮の御心中

あいだれて 　しなやかなる様子也

哥かたえかれにし 　柏木とおちはとの間の支也

かとあるといはれし更衣也 　此更衣は一段分別ある人と云し人也

ふりかたう 　難_レ古

いたうやせ—— おとゞの事也

あいたのむ人く—— ゑもんのかみを。人くなるへし

かうふかき思ひは其大かたの世のおほえつかさ位にも

司位にもかまはず只一筋ニ此人の事哀しとの父おとゞの御詞也

との心ことに 　夕きり也

哥ことならば—— 如_レ是ならば也 　葉_漸ノ神衛門督ニたと

うき世の中をおもひ給へしつむ—— 御息所の詞也 　ゆる也

なとてみるめによりて—— おほす 　夕霧ノ心也ちと聞にくき

所也大方は花鳥にありよくく了見して聞へし

かのおとゞは 　源しなり

(白紙)

追

かれ聞給へ何のつみと也—— 侍従にかしはきの語る

ことは也

なをはなやきたる所つきて物わらひし給 　おとゞの事也

さてなからへぬわさならばこそは—— 源しの御詞也女三の御

命長かるましくはこそ御出家あらふすれと云心欵御命

┌ (92ウ)

┌ (93オ)

└ (93ウ)

「哥」ハ「守」カ。

くるしかるましいと也

聞きよりは心のおく見え給へ—— 一段ほめたり

一ふたつのふし—— 林先ッ一ハ女三ノ宮の御うしろみを望しかとも

位などまた浅きとて召寄られざりし事也又一は何事

にても有ん又天かしたをからはんとの心中も有へし「説ハは

玉髯の支をも始は思懸しなれば左様の事もまじるへ尋流き欵

子もちのおまへ—— 子持也女三をさして申也

御かゆどんじき 御粥也 とん食は色とりたる飯也下ッくの

くい物也

院のしもべ—— 六条院なり林

ちやうのめしつき所 廳の召つかふ者也林長ノ字を書たる本アリ

不審或人の仰らる廳とは内裏にて一所の所也そこをあづかる

人を別廳と云り

宮司の大人 林 中宮の宮つかさの大夫也 河宮司は中職 大夫ハ督也

みんの殿上人 冷泉院の天上人也休一葉 朱雀院の殿上人東

二品の宮の御事をおしみたれけるつゝみてに——

此二品とあるは女三宮ノ御事也 朱雀みんの女三の御事を兎

角おほしめすによりて落はの宮をは柏木ニゆつりて心安ッ

おもひ給也とかしは木のとへる也林 女三の二品ニ成給し所を

爰に注し付ル

墨染こそなをいとうたて—— 誠の墨染にては有まし

けれ共すみそめと云林

ふりかたうわりなき—— 泪の支也古もせで今もたゆま

す

「 (94ウ) 」

「 (94オ) 」

落る心なり

なんちかちゝにともいはましよう——

河海ニ委 楽天か

心は卑下也源しの今の御心には誠に汝か父ニ似ル身なかれとおほし

けんかしと双紙ニ書る詞なり

此事の心しれる人女房の中にも—— 柏木の媒せし

人の事也

をこなりとみるらんと—— 源氏の御心也 年よりて子を

まうけたれと人や思はん柏木の子と知人あれかしと也

哥うらめしや—— 弁の君の歌 是紅毒の右大臣也 誰

きよとは親ニ服衣をさせ給をかこちたる也 花のちりけんとは

かしは木そ

とん食五十食

私五十具トハ五十人分の膳と云義欵椀は一膳二膳とも一具二具とも云也然ハ五十具とは五十膳の儀と聞えたり

(三行分空白)

横笛

以歌為卷名詞ニはたゝ笛と計あり源氏四十九歳ノ時也

かほるは二歳也 匂宮三歳

横ふえのしらへはことにかはらぬを空しく成し音こそつきせ

笛と云は竹の楽器の惣名也箏ひちりきなんとも皆々豎

に吹なり是は横に吹により如此号

(一行分空白)

御はてにも—— 一周忌

なき跡にも—— かしは木を人の用ると也

入道の宮 女三

┌ (95オ)

┌ (95ウ)

おなしみちをこそは 同し佛道也

おなしところを君も 同所ニ生れ給へと也

らいしともを—— たかつきの様なる物也ものをすゆる

具也たかうな又はところなと入たり

書かへ給へりける—— 書そこなへる歎

み木丁のそはより—— 源しの見給

うしろめたけなる—— 柏木の事源氏ノ御心にかゝる

ゐてはなちて—— 将放 とり放たる也

えとりやらで 琴比巴などの類をえとりをかざる也

かきならし給しはや はやニ心なし 君か住宿の梢を行

くもかくるゝまてにかへりみしはや此哥の類也

院の御前にて—— 御息所の詞なり

みゝをたにあきらめ—— 御息所の詞也 如聴仙楽

耳暫明比巴引

しかつたはる しかと句を切てつたはると読へし

さうふれんを引給ふ 夕霧の引給り ふもし濁

哥ことにてゝ—— 琴を懸てよめり 意は想夫憐と

云事を言_{コト}出していはぬ也是ニよりてすゑつかたを少し

引給り此義理は私ニ見出ヌ一段おもしろしと素然御自負也

花鳥ノ説如何と仰られき

ふるぎ人の—— 母御息所

引たかふることも—— 夕霧のなまめく心をちと

にははせ給り

┌ (96オ)

┌ (96ウ)

┌ (97オ)

今夜の御すきには人—— 爰は草子のこと葉とみるへし

花鳥の説如何

玉の緒にせん—— 此事落居しかたし不審也と仰

らる 是はとて御をくり物にと書ル詞つゝきの事也此つゝきやう
落居しかたし

是になんまことにふるき事も—— 余の楽器は当座

／＼しなをすもの也横笛ハさもなき物なればか様ニ

ふるき更もつたはるといへり

御さきにきははん—— 相伝あらんその先々也其をみさき

おふにちとかりて云ルソ

きこえ出し給り みすの中より也

殿にかへり給へれば 夕霧のかへり給也

あなむもれや あらきうくつやとの儀也

夢みる人は—— 夢みるとは寝ル心也

ありつる所のさま 一条の宮の事也

こきみ 古君とは柏木なり

見をとりせんこそ 形よくもおはせぬと聞及給り

哥 ふうえ竹に—— 夢ニかしは木のよめり 風のごとならば

とは如ならは也 薰ニつたへ度との心也

思ふかたことに—— 童の乳を吐ク事なり

つたみなとし給へは 髪にてみ々の見えぬやうニつくろふ

耳はさみなとし給へは 事か本也それを耳にはさむをみ々はさみと云り略儀の姿

打まきしちらし 散米の事なり 是ニよりて米を世間ニ

「(97ウ)

「(98オ)

うちまきとは云り

出給ひね 御帰りあれと雲の鴈のの給也

しうはとゝめし 執心也

三の宮 匂宮也

大将こそ宮いたきたてまつりて 匂宮ノ我と宮と仰らる

公卿のみざ也 御座なり

よへかの一条の宮に—— 夕霧の源氏ニかたり給也

おもひしらるゝ事ともこそおほかれ—— 此想夫恋の事は柏木

の支なれとそれから好色の事ニなる事多クあるものと

仰らるゝ源しの御ことは也

人にしられぬとならば 終ぬ也

さかし—— 源氏の非を夕霧のおもひ給也落

はに夕霧の御心ひくによりてかく思ひ給り

あされかましうすきくしき—— 夕きりの好色

めかぬゆへにやとなり

其みけしきを—— 是程の次ては有ましとおほし

召ス夕霧の心なり

よるかたらずとか—— 夢を夜ル語ぬものと世間に云

ならはず也小六かしくしてしるく御返事なし

(二行分空白)

追

ふたあいのなをしのかきりをきて—— 二藍は赤花青花

にて染ル也二藍ともいふ也 かきりとは色はかはれ共直衣は離レ

紙ニ薄墨ノ滲ミアリ。

「(98ウ)

「(99オ)

ぬ心也驛 此外河海花鳥説々あり 林

みさきにきおはん聲なん—— 御さきの聲ニあらそひて

笛の声せんを聞まほしきと御息所の詞なり 林

につかはしからぬ—— 夕霧ノ卑下の詞そ

身にそへてもてあそひつゝ—— 此笛まことに柏木の

持給し笛と也夕霧の詞也卑下也 林

おもはん人にいかてつたへてしかかと—— 思ん人にとはよく達し

たる。傳え度と柏木のの給しと也 林

これがねのかきりは—— かしは木の云し詞を夕霧の思ひ

出し給也このふえの音は柏木もてふきいたさぬと申給しとそ 林

(以下九行分空白)

(一面白紙)

すゝ虫

以詞并為卷名源氏五十歳横笛の次ノ年也豎ノ

ならひや 夕霧は廿歳也 大かたの秋をはうしとしり

にしをふりすてかたきすゝむしの聲

(一行分空白)

めそめ 清濁いづれもよし 染付たる事なるへしと也足仰らる

目染とはくゝり染マ也目結メぞめ也 花机の霞は大略は地を紫ニ

そめて白ク目を結メなり

花かめ 清てよみ給り 問かへは清て覚たりさりなから濁

て然へき所也と仰られ候落居すます

百ぶのえかう くぬえ香の事也 兎角ニ薰衣香の叟也

┌ (99ウ)

┌ (100オ)
┌ (100ウ)

┌ (101オ)

みつをかくして 蜂蜜を除キあまづらにて合られたる歎

五六十人はかり—— こと／＼しく爰もとの為躰源氏の御心ニ

しませ

さきら 弁説の事也

三条の宮の御くら—— 朱雀院よりの御ゆつり

我御あつかひにて—— 源しの御あつかひ也我とは源しの

御支

あかつきの音 花皿のをと也 紹巴はあかつきの音と読是も

おもしろし きもし濁

あみたの太す。

すゝむし 今ノ世に人の鈴虫ト云ハ松むし也蚕虫ト云はすゝ虫也

心もて草の—— 源ノ御哥也 六条院を草のやとりに喩ル也

三条へ御出あり度との心を察ノよみ給へり 鈴虫ニ女三を喩

こなたにおはしますと—— 女三のかたに也

冷泉院^{レイゼンイン} れいせん院とよみてもくるしからすとそ

左大弁式部大輔 文ある人達也

哥月影はおなし—— 源氏御卑下の歌なり

ことなる事—— 哥をことはる語也

中宮の御かたに渡り—— 冷泉あんのうちにて

中宮の御ざあるかた也

たゞよはし給なと 願イ也 云懸そ

たゝなき人の—— 六条の御息所の事也中宮ノ詞也

物のあなた—— 今一重分別なかりし支也

「 (101ウ)

「 (102オ)

いそかれ給て 位さり給支を急がされ給て也

(以下九行分空白)

追

行香の人 行く香を焼役者

けうしのほさち 脇士ノ菩薩は観音勢至

はたのさま 天盖幡の事也

花つくえのおほひ 花籠をすゆる机也林

やかてしつらはせ 源し御取もちにて持佛の御

しつらい共せさせ給りやかてとは御念誦堂の具共させ

られたるを堂はいまた立られさる間此供養まつ用ひ

られたるとの心なり一葉 前々よりし置給ふ具共を

今の用にたて給也

青き白き紫の 花を作てあか皿入て置也今もある

事也此筆无々瓶にさしたる作花なるへし

うちの御前にこよひは月のえん 禁中ニ月の宴

有むとて人く参りしを俄とまりてむほとに

六条院へ皆々来ると也

ことなる事なめれと 哥の批判也 双昏也

院の御車にみこたてまつり 源氏の御車ニ兵部卿同

車也 親王とは兵部卿林

大将左衛門督藤宰相 以上三人 大将とは夕霧也残り兩人

は致仕の御子也系図不入河 あるかきりつれたちて参り給也

私此三人は面々の御車なるへし

┌ (102ウ)

└ (103オ)

下かさねはかり奉りくはへて—— 源氏はかり下襲を着し

直衣に下襲を加ル 亘はとりつくろふさま也 花宴卷ニモ給也あり

九重のへたてふかう—— 中宮の御返事也こゝのへは

隔ある事ニ取なし給也大裏にまします時より源し

のうとく敷ましくしとや

おもひの外に—— 冷泉院におりさせ給てのとかにて中

宮も御障却てましまさぬとそ

みな人のそむき行世を—— 引哥皆人のそむき

いてにし世中にふるのやしろの身をいかせむ

その心の中をきこえさせ—— 心の中とは世を背

へき志の事也何事もたのもしきかけにとは頼むニ付て

何亘も聞え習たるをちかきほとは餘所くなるやうにて

かゝる心の程を知せたまつらぬにいふせきと也何事も

源をたのみなから出家の本意をいまた聞えさせぬと也

けに大やけさま—— 源氏の御詞也大内ニましく

ける時は御いとまなと申給て御里居なともし給ひし

となり

御こゝろにまかせさせ—— 冷泉院のおりる給ては中

宮の却而御障もなくそひ給となり

(以下四行分空白)

「(103ウ)」

「(104オ)」

「(104ウ)」

虫損。

左下ニ「月明莊」(朱単辺長方角印)、その上白ニ「実践女子大学図書館印」(朱単辺長方印)、左ニ「常磐松文庫印」(朱単辺長方角印)ヲ捺ス。
緑色ノ縦四・六種、横一・七種ノ紙片ニ「墨付一百枚」トペン書シタモノヲ挟ム。

送
いづれは
あはれ
いづれは
あはれ
いづれは
あはれ

若菜下 三軒二月三日... 中流... 舟...
... 此美... 後... 舟... 舟...
... 舟... 舟... 舟... 舟...
... 舟... 舟... 舟... 舟...
... 舟... 舟... 舟... 舟...
... 舟... 舟... 舟... 舟...

常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』「初音」

侍... 具... 若菜下...
... 若菜下... 若菜下... 若菜下...
... 若菜下... 若菜下... 若菜下...
... 若菜下... 若菜下... 若菜下...
... 若菜下... 若菜下... 若菜下...

... 若菜下... 若菜下... 若菜下...
... 若菜下... 若菜下... 若菜下...
... 若菜下... 若菜下... 若菜下...
... 若菜下... 若菜下... 若菜下...
... 若菜下... 若菜下... 若菜下...

同上「若菜下」

朽れ出らる 勝乃半
 夢はうつろふにあり 吾も亦にゆくあり一
 昔を思ふとせり
 昔は侍とて 此の道 女君とて
 浦の人と此君と 権斎は侍とて此の道
 夢や
 夢より夢をみればゆく ゆくよ夢をみれば
 持たざる夢をみればゆく ゆくよ夢をみれば
 夢の實心て 一宮の夢の道ゆくあり
 三宮の夢の道 此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道

夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 六の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 十の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 十の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 十の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 朱雀院の林道より
 源氏物語
 源氏物語

常磐松文庫本『九条家本源氏物語聞書』同「若菜下」

夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道

夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道
 夢の道は侍とて此の道は侍とて此の道

同上「若菜下」